

—— 河正雄講演録 ——

私と清里
露堂堂と生きる



私塾 清里 銀河塾
2024年

—河正雄講演録—

私と清里

露堂堂と生きる

2024年7月20日(土)

主催 北杜市教育委員会学術課

場所 山梨県北杜市 浅川伯教・巧兄弟資料館

目次

1. 講演録 私と清里 露堂堂と生きる	
日本語	2
韓国語 (翻訳・李洋秀).....	15
インタビュー	26
2. 温故知新 浅川伯教・巧兄弟顕彰碑建立	28
3. 北杜市・抱川市姉妹都市交流 20 周年記念事業	
浅川伯教・巧兄弟記念公園建立	46
4. 経歴	61
5. 著書	62

私と清里

露堂堂と生きる

(1) 一故郷はありがたきもの—

私が生きた在日 85 年間には日中戦争、第 2 次世界大戦、終戦による朝鮮解放、そして朝鮮半島に於ける南北戦争、オイルショック、バブル崩壊、阪神淡路大震災、東日本大震災、新型コロナウイルス禍、ウクライナ軍事侵攻、そして能登半島地震等々、暇ない社会変事と自然災禍があった。人生とはこういうものだと、平常心を保ちこれらの変事を潜り抜け生きることが出来たのは、幸いである。

私を育み、血と肉を作った故郷は生誕地の布施森河内(現東大阪市)より生後移住した秋田県の生保内(現仙北市)。2 歳から 4 歳まで一時住んだ父母の故郷である韓国全羅南道靈岩。秋田工業高校卒業後に埼玉県川口市を故郷にして 65 年になる。

もう一つ大事な故郷がある。21 歳の時にふらりと降り立った浅川巧のふるさと清里(山梨県北杜市)である。

私は秋田工業高校 3 年(1958 年)の時秋田県立図書館で安倍能成著『青丘雑記』を読んだ。そこには浅川巧を「露堂堂」と生きた人と書かれていた、浅川巧との出会いである。そして、その後の清里ライフの基になった。

植民地支配下にあった、朝鮮に生きて朝鮮の人々から愛された稀有の日本人である。巧の生涯は「人間の価値」が実に人間にあり、それより多くでも少なくでもないことを、その生が示した国際人である。

在日で生きる為の哲学を教えられたのが、浅川巧の生き方である。それは「人間の価値」の一文からである。浅川巧の業績は多くあるが、私の感銘は、その生きる姿、考え方であり、日々の行い、営みである。

浅川巧は、韓国の山河や歴史と文化を大きく深いところで見つめていた。国や民族を乗り越えた「共生」を考えていた人であった。

私の在日生活は 85 年になる。その間、時代は物質文明のみ目覚ましく進み格差社会となった。人々の心の病は深く荒んで嘆かわしい。私達は不幸であった韓日の時代を乗り越え、21 世紀に甦り誠心を込めて友好親善を培い、兄弟であることを忘れてはならないと浅川巧は語りかけている。

私は在日の生を巧のように「露堂堂」と生きたいと念じた。巧のふるさと清里にも住まいを持って生きた 60 年、故郷はありがたきものである。

(2) 一露堂堂と光る一

1995 年 11 月 27 日、ソウルで行われた没後 64 周年を記念する韓日合同による追慕祭が初めて開かれた。世間の評価から超然としていた浅川巧に光が当たった。

2016 年、戦後 70 年を記念して「朝鮮日報」と国立大韓民国歴史博物館が選定した「韓国を輝かせた世界の 70 人」に、朝鮮半島緑化と白磁の価値創出に努めた浅川巧が選ばれた。

韓国人の中で浅川巧ほど親しまれている日本人はいない。韓国人が感謝し、愛し、信頼し、尊敬されている光であった。

「土に体をつけ暗い夜にも体から光を放ち周囲を明るくするような人」と和田春樹氏は著している。

「植民地時代に、日本の朝鮮支配の共犯者であるという責任から逃れることが出来る日本人は只の一人も存在しなかったとするならば、その矛盾を孕んだ生の中にキラリと光るものの正体を見極めることが大切である。」甲府市の備中氏の論評である。

「日本人の朝鮮観の形成に大きな影響を及ぼした思想家の一人に福沢論吉がいる。彼の脱亜入欧論の鎖の環をなした朝鮮論は、欧米的近代化の遅れた朝鮮は蔑視すべし、処分すべし、というものであった。この福沢の朝鮮論は、形を変えて、今もなお多くの日本人

をとらえている。

浅川巧が重要なのは、彼が、欧米と朝鮮とを比較して、欧米が進んでいる、朝鮮が遅れている、というような問題の立て方をしなかった人であるからである。浅川巧のように朝鮮をあるがままにとらえ、なおかつ愛した人は、そう多くない。」と高崎宗司は『浅川巧全集』に著している。

2023年は関東大震災100周年を記念した数多くの行事が韓日両国で開かれた。情報や言論が統制されている時代にもかかわらず、浅川巧は「朝鮮人の放火などを自分は信じない。一体日本人は朝鮮人に対する理解が乏しすぎる。そんなに朝鮮人が悪い者だと思いついた日本人も随分根性がよくない。よくよく呪われた人間だ。彼らの前に自分は、朝鮮人の弁護をするために行きたい気がする」と官憲を恐れずに著している義人でもあった。

日本人の多くが朝鮮人を蔑視する風潮が強かった時代に、浅川巧はそれとは無縁のところから、朝鮮の民族と文化を理解しようとした。これまで日韓関係がぎくしゃくを繰り返してきた。今こそ、巧の生き方を学ぶ意味があると思う。浅川巧は巨視的に人間・朝鮮人を見つめた人であるからだ。

私達は自省して良い心、広い心、同じ心を通い合わせ心して未来の子らの為、世界の為に寄与貢献する世界の民とならなければならない。

「知の究極は真を観ることである。情の表現は美でなければいけない。意志の理想は善であること。自分の為に生き、人の為に死なねばならない。」という伊藤日出男の人生庭訓から学びたい。

(3) 一白磁の人一

ソウル特別市が管理する京畿道九里市忘憂里公園市民墓地には、南北分断による不遇の画家大郷・李仲燮(1916年～1956年、享年40歳)が眠っている。李仲燮は韓国美術史で評価が高い現代洋画家である。

墓地には張徳秀、韓龍雲、文一平、呉世昌等独立の韓国近現代史を刻む著名な人士の

墓がある。それらの近隣に韓国人に愛慕され守られている日本人・浅川巧の墓がある。

浅川巧(1891年～1931年、享年40歳)は、山梨県北杜市高根町に生まれた。山梨県立秋田農林学校卒業後、四年余り秋田県大館営林署で農林技師として務めたが、兄伯教と前後して朝鮮に渡る。

農林技師として植林緑化の普及に努める傍ら、失われようとする朝鮮の美の発掘に貢献した。植民地下にあった朝鮮に生き愛された稀有の日本人である。30数年前までは浅川巧の生地山梨県北杜市すら彼の事はあまり知られていなかった。

私は1958年に秋田の高校時代に浅川巧を知った事から、在日として生きる為の人生哲学を学んだ敬愛する日本人である。人間誰でも自分だけの隠し田を持ちたがるものだが、朝鮮人と向き合った浅川巧は隠し田など一切持たなかった。

自分のルーツが高句麗人だと思っていたらしい浅川巧は、高句麗人の血が故郷の朝鮮へと私を呼んでいると、告白した事からも朝鮮への愛の深さがわかる。歴史的に植民地下の難しい時代に、両国の故郷でも受ける苦難を、自分の生涯に代わる愛の対象とした。生きた時代や境涯は違えどもディアスポラである在日二世の私には、理解共感する世界人であると思った。

浅川巧の名著『朝鮮陶磁名考』(1931年刊)の末尾に記した「民衆が目覚めて、自ら生み、自ら育ててゆくところに全ての幸福があると信じる」の文は、その愛の証である。

「今後朝鮮陶磁器の研究は朝鮮研究の発達と共に発達するであらう。しかもその如何なる研究者も今後必一度は、本書の門を潜って数を受けずには居られないであらう。朝鮮の学徒が故国の文化に眼を開く時、この書の如きは恐らく併合以来日本人のした仕事の中で、最も多くの感謝を期待せれるべき一つであらう。」と安倍能成は称賛している。

朝鮮松の露天理蔵法による種子の発芽、養苗開発など、その業績は光る。朝鮮民族美術館建設の推進、朝鮮陶磁器や工芸の研究、朝鮮の膳などの工芸美を考察、収集し、著書を残した。韓民族の美意識と魂を、民芸と植林の領域で我々の自尊心を高めてくれた。

日本民芸館の創立者柳宗悦(1889年～1961年)は『朝鮮陶磁名考』の序文に「どんな著書も多かれ少なかれ先人の著書に負うものである。だが此著書ぐらい、自分に於いて企

てられ、又成された物は少ない」と記している。

柳宗悦は「朝鮮人は日本人を憎んでも浅川巧を愛した」という文を著し、晩年に仏教でいう「妙好人」の言行として遺している。

また「浅川巧さんを偲ぶ」の文で「浅川が死んだ。取り返しのつかない損失である。あんなに朝鮮の事を内から分っていた人を私は他に知らない。ほんとうに朝鮮を愛し朝鮮人を愛した。そうしてほんとうに朝鮮人からも愛されたのである。死が伝えられた時、朝鮮人から献げられた熱情は無類のものであった。棺は進んで申出た人達によってかつがれ、朝鮮の共同墓地に埋葬された。

私とは長い間の交友である。彼がいなかったら朝鮮に対する私の仕事は其半をも成し得なかったであろう。朝鮮民族美術館は彼の努力に負う所が甚大である。そこに蔵される多くの品物は彼の蒐集による。

もっと生きていてくれたら、立派な仕事が沢山なされたであろう。彼程朝鮮の工芸全般に渡って实际的知識を有ってある人はなかつた。私達が計画し合った仕事も多いのである。半にして彼に死に別れた事は、遺憾の極みである。彼のいない朝鮮は、行き所のない朝鮮の様にさえ感じる。」と惜しんでいる。

「柳宗悦らの民芸運動は朝鮮の日常雑器によって開かれた眼を、日本に転じる所から生まれた。日本の民芸運動の誕生の機縁となった結びつきを作った人に柳の友人としての浅川伯教、巧兄弟があつた」と哲学者鶴見俊輔が述べている。

山梨県北杜市出身の江宮隆之著『白磁の人』(1994 年刊)の映画化がなされ 2011 年完成し話題となって十数年となる。

制作過程で両国で紆余曲折はあつたが、浅川巧生誕 120 年・没後 80 年節目の記念年にあたる 2011 年完成上映を見たものである。

つい最近まで韓日両国の若人達や、浅川巧が勤務していたソウルの林業研究院の職員達らも関心が薄く、あまり知られていない存在を憂える人々がいる。この映画上映を通して、両国の青少年達に韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心の中に生きた日本人・浅川巧の時代を振り返り、浅川兄弟の業績を検証し学び合つて、未来に福音をもたらす果実を収穫せ

ねばならない。省察を込めながら私は期待を寄せている。

(4) ー安倍能成の『青丘雑記』についてー

『青丘雑記』は1932年に岩波書店より刊行された。収められている随筆は29編に及び、追悼文である「浅川巧さんを惜む」と功績を紹介した「浅川君の『朝鮮陶磁名考』」の2編は、感動や感銘では言い表せない文である。

自分より優れたものに対し認め、敬う心、素晴らしき友情の美と魂の真を読み取ることが出来る。

私は墓標に「善盡美盡」と刻んでいる。由縁は『青丘雑記』との出会いによるものである。生前に会ったこともなかった浅川巧の精神に憧れ、敬愛した人生の後仕舞いである。

安倍能成(1883年－1966年)は自然主義学派の哲学者でカント哲学研究者として知られる。新制学習院院長となり、没時まで在任、現上皇様の青年期にも講義されていた。

旧制第一高等学校在学中、夏目漱石や波多野精一、高浜虚子らの影響を受けた。岩波書店を起こした同期の岩波茂雄との交流は終生続き、岩波の『哲学叢書』の編集、戦後は平和運動に参画し、岩波書店の『世界』創刊期の代表となり関与した。

1942年から1926年に渡るヨーロッパ留学からの帰国後に、京城帝国大学教授となる。朝鮮の文化を詳細に検討し、日本人の朝鮮人蔑視感情を諷め、戦前の軍国主義に対する批判、戦後の社会主義に対する過大評価に批判的であった。戦前戦後を通じ一貫したリベラリスト・自由主義者である。

温故知新、『青丘雑記』序文の要旨を述べる。

本書は大正十五(1926)年二月私が欧羅巴(ヨーロッパ)の見学から帰って朝鮮に赴任して以来、約六年間に渡り、時時の心持ちに任せて響いた雑文を収録したものである。

『青丘雑記』の名は、本書に収めた全ての文章が朝鮮で書かれたことに由来し、青丘は朝鮮の雅名であり、東の国を意味する詞である。

朝鮮に渡来したことは、私の生涯にとっては可なり著しい変動ではあるが、私は概して全ての土地に離れ難い程の愛着を感じないと共に、大抵の土地に美しさと好ましきとを見出すことの出来る人間である上、京城には東京以来の旧知も初めて得た新知もあって、私の私生活には自分自身に対する以外に殆ど不満足は少なかった。

朝鮮の自然も朝鮮の文化も、其自身としては優れたものでないけれども、私は如何なる自然にも、普遍的な又特殊な美しさがあることを知って居るし、又朝鮮の文化は特に日本文化との関連に於て私の興味を引くことが多い。唯現在の内地人と朝鮮人との間には、余りに生々しい幾何かの問題が充ちて居て、それに切入ってゆくことは愉快よりも寧ろ苦痛が多い。

私が朝鮮に来てからの大きな悲は、昨春浅川巧君を先立て、別れたことである。私のこの書によって、私から見て余りにも少ないと思う内地人の関心を、多少とも朝鮮に向け得るならば、それは望外の幸である。

(5) 一和辻哲郎の『『青丘雑記』を読む』一

日本的な思想と西洋哲学の融合、あるものを、そのものとしては否定しながら、更に高い段階で生かすことを目指した和辻哲郎(1889年－1960年)が1933年に帝国大学新聞に、1932年刊行された安倍能成著の『『青丘雑記』を読む』を載せている。

和辻氏は倫理学者、文化史家、思想史家、『古都巡礼』『風土』などの著作で知られる日本の稀有なる哲学者である。

以下は和辻氏の『『青丘雑記』を読む』の要旨である。

『青丘雑記』は朝鮮、満州、シナの風物記と、数人の故人の追憶記及び友人への消息とから成っている随筆集である。

著者はこの書の序文において、「悠々たる観の世界」を持つことの喜びを語っている。この書はこのような心持ちに貫かれているのである。

人が悠々として観る態度を取り得るのは、人間の争いに驚かない不死身の強さを持つからである。著者はシナの乞食の図太さの内にさえ、それに類したものを認めている。寒山拾得はその象徴である。

(6) —「人間の価値」—

安倍能成は、その著『青丘雑記』(1932年 岩波書店)の中に「浅川巧さんを惜む」を書いたが、これが1934年、中等学校教科書「国語六」そして権域抄(1947年)に「人間の価値」と題して収録され、世の人々に知られる事となった。

「巧さんのやうな正しい、義務を重んずる、人を畏れずして神のみを畏れた、独立自由な、しかも頭脳が勝れて鑑賞力に富んだ人は、実に有難き人である。巧さんは官位にも学歴にも権勢にも富貴にもよることなく、その人間の力だけで露堂堂(禅語、何一つかくすことなく堂々とあらわれるさま)と生きぬいて行った。かういう人はよい人といふばかりでなくえらい人である。かういう人の存在は人間の生活を頼もしくする。(中略)人類にとって人間の道を正しく勇敢に踏んだ人の損失ぐらい、本当の損失はないからである。」安倍能成をしてかく言わしめた浅川巧は、私の心に普遍の価値として生きてきた。

「“俺は神様に金はためませんと誓った。”と言はれたそうである。一種の宗教的安心を得て其自身の為になされてその他の目的の為に、報酬の為になされることを極度に忌まれた様に思ふ。道徳的純潔から来たものであろう。」

弱者を見過ごせない清貧の人、右手で行った善行を左手に知らしめない行事は常に朝鮮の人々の心にとけこもうとする彼の人格がさせたことだ。

「好悪な者、無能な者、怠惰な者、下劣な者の多くははるかに高禄を食み、長を享樂しているが、巧さんのごときは微禄でも卑官でもその人によってその職を尊くする力ある人である。巧さんがこの位置にあつてその人間力の尊さと強さを存分に發揮し得たといふことは、人間の価値の商品化される当世に於て、如何に心強いことであろう。私は巧さんの為にも世の為にも寧ろこの事を喜びたい。」

「巧さんの仕事が、種を蒔いて朝鮮の山を青くする仕事で、一粒の種を蒔き一本の木を

生ひ立てた方がどんなに有益な仕事か知れない。巧さんは『種蒔く人』であった。」「朝鮮人の生活に親しみ、文化を研究し、大正十二年来、柳宗悦君や伯教(のりたか)君と協力して朝鮮民芸美術館を設けた巧さんの態度は実に無私であった。内地人が朝鮮人を愛することは、内地人を愛するより一層困難である。感傷的な人道主義者も抽象的な自由主義者も、この実際問題の前には直ぐに落第してしまふ。」

「巧さんの生涯はカントのいった様に、人間の価値が実に人間にあり、それより多くでも少なくでもないことを実証した。私は心から人間浅川巧の前に頭を下げる。」

私は人を惜しむ文で、これほど痛切に真情を吐露した友情の言葉を他に知らない。この文章が、戦後になってなぜ教科書から消えてしまったのか。政治や経済が変われば、「人間の価値」そのものまで変わっていくとでもいうのだろうか。価値は変わらないのだが人間が変わり、世の中の都合で変わっただけではないかと思われるがどうであろうか。

今日まで浅川兄弟に敬慕、感謝の心を抱いて在日を生きてきた。私は、どんな時代でも「人間の価値」は変わるものではないと思う。

著者は朝鮮の風物を語るに当たって、我を没して風物自身のしみじみとした味を露出させる。しかもこれらの風物は徹頭徹尾著者の人格に滲透せられているのである。

我は没せられつつ、しかも対象として己れを露出して来る。ここに著者の風物記の滋味が存すると思う。

一人旅の心を説くのも、我執に徹することによって我から脱却し、自然に遊ぶ境地に至らんがためであった。

脱我の立場において異境の風物が語られるとき、我々はしばしば驚異すべき観察に接する。人間を取り巻く植物、家、道具、衣服等々の細かな形態が、深い人生の表現としての巨大な意義を、突如として我々に示してくれる。風物記はそのままに人間性の表現の解釈となっている。

著者が故人である浅川巧氏を語るに当たって示した比類なき友情の表現もまた、同様に脱我の立場によって可能にせられている。

特に人を動かすのは浅川巧氏を惜しむ一文であるが、著者はここに驚嘆すべき一人の偉人の姿を、おのずからにして描き出している。

描かれたのは、あくまでもこの敬服すべき山林技師であって著者自身ではない。しかも我々はこの一文において直接に著者自身と語り合う思いがある。

悠々たる観の世界は否定の否定の立場として、自他不二の境に我々を誘い込むのである。「そこより出で来たるその本源の境地に帰る」ことである。

(7) ー清里銀河塾開塾への思いー

韓国と日本の中学校教科書に唯一紹介されている日本人・浅川巧。しかし両国民に広く知られていない人物である。韓国では功績に反して、いまだ知名度が低く残念である。

しかし浅川兄弟の生き様を通して学ぶと温故知新、韓日の人々が共に学ぶべき今日を生きる普遍なる教えがある。

1991年山梨県北杜市に浅川伯教・巧兄弟資料館が建立された。その前年、旧高根町から作品や資料の寄贈要請があった。

私のコレクションであった人間国宝、柳海剛や池順鐸の青磁・白磁などを含む、韓国民芸品など67点を寄贈した。

その折、寄贈作品を展示するだけに終わらぬ事業に活用して欲しい。資料館は公的博物館としての役目を果たす研究機関でなければならない。様々な分野での先駆者を育てた山梨の風土や歴史、文化を学ぶ「浅川学」の学術研究機関となって社会に還元して欲しい。

市民教育、特に次世代の青少年教育のプログラムを持って、日韓の相互理解、友好親善交流を促進し、国際親善に寄与せねばならないと具申した。

日韓の相互不信を解くには、人と人との生身の触れ合いと心の交流に尽きるとの信念からである。

寄贈後、私ができる事、役立つ事は何かと考え続け、辿り着いたのが私塾清里銀河塾の創設であった。

1961年に初めて八ヶ岳山麓の清里の地に降りた私は、その雄大な自然から神秘を感じ

身震いをした。

私塾・清里銀河塾での開会挨拶はいつも、この偉大なる自然の大気から学ぶものがあると強調している。その拘りは、清里に降り立った時の感動とインスピレーションが鮮烈に生きており、持続しているからだ。

私の雅号は「東江」である。ヒマラヤに降った雪や雨が川(水)になって流れて大きな河となる。その河が江となって海に流れ込む。海流は流れ行き、その流れは気流となって空で浄化される。悠久に繰り返される自然の摂理は、ヒマラヤに降り注ぎ循環する。高校卒業の時の寄せ書きに「大河の如く」生きると書き残した。宇宙の摂理に生きる私の哲学を表したものだ。日本(東)の大きな河(江)になろうという在日の気概である。

私は父母の故郷である霊岩の王仁博士廟(王仁博士遺跡趾は全羅南道記念物第20号)に立ち、西に広がる空を仰ぐ。ある時はゆったりと、大陸から寄せ流れて来る雲の動きに見とれる。この大気の流れの先に私が生まれ住む日本列島がある事に感慨を催す。また桜の季節などは、私が住む川口市にある氏神様の境内に桜のほころびが、王仁廟の桜並木と同時期である事から、桜を愛でる春は日本と韓国の距離を忘れ一衣帯水である事を実感する。

また霊岩の国立公園月出山は「気の山」と呼ばれている。ヒマラヤからの気流がゴビ砂漠、朝鮮半島を南下して月出山に流れ込むからだという。霊岩人は、その気を強く受けているとよく言われる。私にも、その気が流れていると思うのが自然なのだと思う。清里には、その気が充満している。

(8) 一清里銀河塾から何を学ぶのか一

20代から清里の地で余暇を過ごすようになった。この地域の風土に育まれ人生を送り、間もなく85歳になる。この地に私が憧れ、尊敬する偉人がいたからだ。

この世に人間愛を教え施された、この先賢は在日として生きる私の師であり、人生の指標であった。一人の人間として真実の道を切り拓き歩まれた先賢の足跡は、日本の風土に息づいており、現代を生きる人の心の根に、日本の風土と韓国の風土を重ねて見えてくる

ものが、在日にあると思われた。

人を形成するものは「人の真実」であると思う。「人の真実」が誇り高く、求道的であれば風土、人も準じる。しかし人心乱れ、荒廃に任せれば風土、人も墮するのではないだろうか。八ヶ岳の山麓、清里の地域風土の中に生まれた精神、浅川兄弟の生き方から学ぶ事の意義と意味を私は見つけたいと思うようになっていった。

清里銀河塾で何を学ぶのか。学ぶ意味、学ぶ楽しみは生きることそのものであるから、その基本となる「生涯学習」について考えてみた。

一般人(住民)は自分の為に、地域発展貢献のために勉強していこう。職業人は職業意識のレベル向上の為に勉強していこう。生涯健康を保ち、元気に生きていく為に、世代を越えて、心と体を養うために学ぼう。好奇心を持って自分を磨き、生涯成長していきたい、善として生きようとする自分でありたい。その学びの本能は誰にでもあるからだ。

学びが成熟する事で本物の自分を確認し、自分の尊厳を見つける事になる。自分自身を慈しみ大切にすることは、そこから相手を認める人間関係を作り、人を愛する事に繋がる。そんな人たちが創る成熟した聡明な社会を創っていきたいと思った。

学びあい、助け合い、共に生きることにより、互いを高め合う自己研鑽を積んでいこう。多様な価値観の中で自ら学び、共に学ぶということは自己が決定することであり、生涯学習はつまり自己教育なのである。学びを楽しむ文化を創造していきたい。

(9) 一浅川兄弟に捧げる遺徳の碑一

私は2006年より私塾清里銀河塾を20回開催した。これまで学んだ塾生は1000人を超えている。

共に学び善き追憶を辿り、先人の徳を慕い回願する事は、相互理解が深まり国際親善の糧となる。

韓国では韓国人に墓が守られ、生誕地山梨県北杜市でも顕彰されるようになった。両国から愛されている人物でありながら、地元の故郷に顕彰碑が建立されていない事を私は長年淋しく思っていた。

ポール・ラッシュ博士は「清里の父」と呼ばれ、顕彰碑も建て敬われ、聖壇にも祀られて久しい。

私は浅川兄弟もいつの日にか、聖壇に祀られる人物であると1997年の浅川兄弟を偲ぶ会総会で講演をした事がある。それ以来、いつの日にか石に刻みブロンズ像を配し北杜市に顕彰碑を贈ろうと20数年間、構想を温めてきた。

2021年は浅川巧の生誕130周年没後90周年記念の年に当たる。6月13日、浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会結成25周年を記念して、「捧ぐ敬愛と感謝を込めて」私の座右である「露堂堂」の碑文を添え、兄弟のブロンズレリーフの顕彰碑を生誕地に建立し、叶うことになった。

碑のデザインは五重塔をイメージする五層(五段)。碑石は上野公園の王仁博士碑に倣って下層四段は国産の稲田石を割り肌仕上げ。上層は韓国産谷城石を本磨きにして、彫刻家・張山裕史氏作の浅川兄弟レリーフを配した。碑文は甲府市の書家・狭山植松永雄氏の揮毫による「露堂堂」である。

安倍能成著「浅川巧さんを惜む」(『青丘雑記』)の文中にある「その人間の力だけで露堂堂と生きぬいて行った」から「露堂堂」の字句を顕彰文に採用し刻んだ。2023年には、北杜市は京畿道抱川郡姉妹都市締結20周年を記念し、資料館前広場を庭園化し、私が寄贈した石材で「浅川伯教・巧兄弟記念公園の碑」を建立した。

名実共に聖壇の夢が正夢となった。浅川兄弟の偉徳の賜物である。昨日から今日、今日から明日への尊い継続。「昔植えた苗木大きく育つ。今日植える苗木、未来の大木。」である。韓日友好の絆を結ぶ交流の広場になることをとこしえに祈念する。

나와 키요사토(清里)

『노당당(露堂堂)하게 살다.』

(1) -고향은 고마운 곳-

내가 살아온 일본생활 85년 동안에는 중일전쟁, 제2차 세계대전, 종전에 의한 조선의 해방, 그리고 한반도에서 일어난 남북전쟁 즉 한국전쟁, 오일 쇼크, 버블 경제의 붕괴, 한신(阪神)아와지(淡路)대지진, 동일본 대지진, 신종 코로나 바이러스 사태, 러시아에 의한 우크라이나 군사침공, 그리고 노토(能登)반도 지진 등 설 틈 없는 사회적인 변란과 자연재해들이 있었다. 인생이란 이런 것이라고, 평상심을 유지하며 이들 사건들을 거치면서도 살아 올 수 있었던 것은 다행이다.

나를 키워주고 피와 살을 만든 고향은 출생지인 후세(布施)모리가와치(森河内, 현재의 히가시오사카시(東大阪市)에서 태어난 뒤에 이주한 아키타현(秋田縣)오보나이(生保内, 현재의 센보쿠시(仙北市))이다. 2살부터 4살까지 잠시 살았던 부모님 고향은 한국 전남 영암이다. 아키타공업고등학교 졸업후에 사이타마현(埼玉縣)가와구치시(川口市)를 고향으로 삼아 65년이 된다.

또 하나 소중한 고향이 따로 있다. 21세 때 무작정 내렸던 아사카와 타쿠미(浅川巧, 1891년생~1931년 사망, 향년 40세)의 고향인 키요사토(清里, 야마나시현(山梨縣)호쿠토시(北杜市))이다.

나는 아키타공업고등학교 3학년때(1958년) 아키타현립도서관에서 아베 요시시게(安倍能成, 1883~1966)가 쓴 '청구잡기(靑丘雜記)'를 읽었다. 거기에는 아사카와 타쿠미를 '노당당(露堂堂, 아무것도 숨기지 않고 당당하게 드러내는 모습. 선어(禪語)'하게 살던 사람이라고 써 있었다. 아사카와 타쿠미와의 만남이다. 그리고 그 후 키요사토 생활의 터전이 되었다.

식민지 지배하에 있던 조선에 살면서 조선 사람들로 부터 사랑을 받았던 드문 일본인이다. 타쿠미의 생애는 '인간의 가치'가 실로 인간에 있으며, 그 이상도 이하도 아니라는 것을 그 삶으로 보여준 국제인이었다.

재일 한국인으로서 살아가기 위한 철학을 가르쳐 준 것이 아사카와 타쿠미의 삶 방식이다. 그것은 '인간의 가치'라는 하나의 문장에서 비롯 되었다. 아사카와

타쿠미의 업적은 수많지만, 나의 감명은 그의 삶의 모습, 사고방식, 일상의 행동과 영위이다.

아사카와 타쿠미는 한국의 산천과 역사와 문화를 크고 깊은 곳에서 바라 보고 있었다. 국가와 민족을 뛰어넘어 '공생'을 생각하고 있던 사람이었다.

나의 재일 생활이 85년이 된다. 그 사이에 시대는 물질문명만이 눈부시게 발전하여 격차사회로 되었다. 사람들의 마음의 병은 깊이 황폐하여 한탄스럽다. 우리들은 불행했던 한일의 시대를 극복하여 21세기에 다시 살아나 성심성의껏 우호친선을 키워 형제인 것을 잊지 말아야 한다고 아사카와 타쿠미는 말해 주고 있다.

나는 재일의 삶을 타쿠미처럼 '노당당'하게 살고 싶다고 원했다. 타쿠미의 고향인 키요사토에 집까지 짓고 살아온 60년, 고향이란 고마운 곳이다.

(2) -노당당하게 빛나다

1995년 11월 27일, 서울에서 아사카와 타쿠미의 서거 64주년을 기념하는 한일합동 추모제가 처음으로 열렸다. 세상 간의 평가에서 초연했던 아사카와 타쿠미에 조명되었다.

2016년 전쟁후 70년을 기념해 <조선일보>와 국립한국 역사박물관이 선정한 '한국을 빛낸 세계의 70명'에 한반도 녹화와 백자의 가치 창출에 힘쓴 아사카와 타쿠미가 선정되었던 것이다.

한국인들이 아사카와 타쿠미처럼 친근감을 느끼는 일본인은 없다. 한국인들이 감사하고, 사랑하고, 신뢰하고, 존경하고 있는 빛이었다.

와다 하루키(和田春樹) 도쿄대 명예교수는 『흙에 몸을 담아 어두운 밤에 도 몸의 빛을 내면서 주위를 밝게 해 주는 사람』이라고 저술하고 있다.

“식민지 시대에 일본의 조선 지배의 공범자라는 책임에서 벗어날 수 있는 일본인은 단 한 명도 존재하지 않았다고 한다면, 그 모순을 내포한 삶 속에서 반짝 빛나는 것의 정체를 파악할 것이 중요하다.” 고오후시(甲府市)에 거주하는 빗추(備中)씨의 논평이다.

“일본인의 조선관 형성에 커다란 영향을 끼친 사상가 중 속의 한 명으로 후쿠자와 유키치(福沢諭吉)가 있다. 그의 '탈아입구론'에서 나오는 조선론은 서구적 근대화에서 뒤쳐진 조선은 멸시해야 하고, 처분해야 한다는 것이었다. 이 후쿠자와의 조선론은 형태를 바꾸어 지금도 많은 일본인을 사로잡고 있다.

아사카와 타쿠미가 중요한 것은 그가 서양과 조선을 비교해서, 서양이 앞서고 조선이 뒤떨어졌다는 식으로 문제를 세우지 않았던 사람이기 때문이다. 아사카와 타쿠미처럼 조선을, 있는 그대로 바라보고 사랑한 사람은 그다지 많지 않다”고 다카사키 소오지(高崎宗司)는 '아사카와 타쿠미 전집'에 저술하고 있다.

2023년은 관동대지진 100주년을 기념하는 수많은 행사가 한일 양국에서 열렸다. 정보와 언론이 통제되고 있던 시대임에도 불구하고 아사카와 타쿠미

는 '조선인의 방화 같은 말을 나는 믿지 않다. 도대체 일본인은 조선인에 대한 이해가 너무 빈약하다. 그렇게 조선인이 나쁜 놈이라고 생각한 일본인도 상당히 마음이 나쁘다. 아주 저주받은 인간이다. 그들 앞에서 나는 조선인을 변호하기 위해 가고 싶은 마음이 든다'고 관현을 두려워하지 않고 저술한 의리의 사람이기도 했다.

많은 일본인들이 조선인을 경멸하는 풍조가 강했던 시대에 아사카와 타쿠미는 이와 무관한 곳에서 조선의 민족과 문화를 이해하려고 했다. 그 동안 한일 관계가 순조롭지 않았다. 지금이야말로 타쿠미의 삶의 방식을 배울 것에 의미가 있다고 생각한다. 아사카와 타쿠미는 거시적으로 인간, 조선인을 바라본 사람이기 때문이다.

우리는 반성해서 선한 마음, 넓은 마음, 같은 마음을 가지고 미래의 후손을 위해, 세계를 위하여 기여할 세계인이 되어야 한다.

“지식의 궁극은 진리를 볼 것이다. 정(情)의 표현은 미(美)여야 한다. 의지의 이상은 선(善)이어야 한다. 자신을 위해 살고, 남을 위해 죽어야 한다.” 라는 이토 히데오(伊藤日出男)의 인생 교훈을 배우고 싶다.

(3) -백자의 사람

서울시가 관리하는 경기도 구리시 망우리공원 시민묘지에는 남북 분단으로 인한 비운의 화가 대향(大郷)이중섭(1916년생~1956년 서거, 향년 40세)이 잠들고 있다. 이중섭은 한국 미술사에서 높은 평가를 받는 현대 서양 화가이다.

묘지에는 장덕수, 한용운, 문일평, 오세창 등 독립 한국 근현대사를 빛낸 저명 인사들의 묘가 있다. 그 인근에 한국인의 사랑을 받고 보호받고 있는 일본인 아사카와 타쿠미의 묘가 있다.

아사카와 타쿠미는 야마나시현 호쿠토시 다카네초(高根町)에서 태어났다. 야마나시현립 농림학교 졸업 후, 4년 이상 아키타현 오오다테(大館)영림서에서 농림기사로 근무하다가 형 노리타카와 함께 조선에 건너갔다.

농림기사로 식림녹화 보급에 힘쓰는 한편, 잊혀져 가는 조선의 미를 발굴할 일에 기여했다. 식민지였던 조선에 살면서 사랑받은 드문 일본인으로 30여 년 전까지만 해도 아사카와 타쿠미의 고향인 야마나시현 호쿠토시에서도 그의 존재는 잘 알려지지 않았다.

나는 1958년 아키타의 고등학교 시절 아사카와 타쿠미를 알게 됨으로써 재일 교포로서 살아가기 위한 인생 철학을 배웠던 존경하는 일본인이다. 사람이라면 누구나 자기만의 사천을 갖고 싶어 하지만, 조선인과 마주한 아사카와 타쿠미는 사천 따위는 전혀 갖고 있지 않았다.

자신의 뿌리가 고구려인이라고 생각하고 있던 것 같아 아사카와 타쿠미는 “고구려인의 피가 나를 고향 조선으로 부르고 있다”고 고백한 것부터도 조선

에 대한 사랑의 깊이를 엿볼 수 있다. 역사적으로 식민지화의 어려운 시기에 양국의 고향에서 받았던 고초를 자신의 생애에 대신하는 사랑의 대상으로 삼았다. 살아온 시대와 평생은 다르지만 디아스포라인 재일동포 2 세인 나로서는 이해와 공감을 할 수 있는 세계인이라고 느꼈다.

아사카와 타쿠미의 명저『조선 도자기 명고(名考)』(1931 년간)의 말미에 적힌 “민중이 각성하여 스스로 낳고 스스로 키우는 곳에 모든 행복이 있다고 믿는다”는 문장은 그 사랑의 증거이다.

“앞으로 조선 도자기의 연구는 조선 연구의 발달과 함께 발전할 것이다. 더욱이 그 어떤 연구자도 앞으로 반드시 한번은 이 책의 문턱을 넘지 않을 수 없겠다고 생각한다. 조선의 학도들이 고국의 문화에 대해 눈 뜰 때, 이 책은 아마도 합병 이후 일본인이 한 일들 중에서 가장 많은 감사를 기대할 수 있는 것들 중 하나일 것이다.” 아베 요시시게는 이렇게 찬사를 아끼지 않았다.

조선송의 노천 이장법에 의한 종자의 발아, 양묘 개발 등 그 업적은 빛 다. 조선민족미술관의 건립 추진, 조선 도자기와 공예 연구, 조선의 선(膳)등 공예미를 고찰하고 수집하여 저서를 남겼다. 한민족의 미의식과 혼을 민예와 식립의 영역 에서 우리의 자존감을 높여주었다.

일본민예관의 설립자 야나기 무네요시(柳宗悦, 1889 년생~1961 년 서거)는 「조선도자기명고」서문에 “어떤 저서든 어느 정도 선인의 저서에 의지하고 있다. 그러나 이 저서만큼 스스로 기획하고 성취한 것은 드물다”고 적고 있다.

야나기는 “조선인은 일본인을 미워하더라도 아사카와 타쿠미는 사랑했다”는 글을 저술하여 말년에 불교에서 말하는 '묘묘인(妙好人)'의 언행이고 남기고 있다.

또한 '아사카와 타쿠미를 추모한다'는 글에서 “아사카와가 죽었다. 돌이킬 수 없는 손실이다. 저렇게 조선을 내부부터 알고 있던 사람을 나는 따로 알지 못한다. 정말 조선을 사랑하고 조선인을 사랑했다. 그렇게 진정으로 조선인들로부터도 사랑을 받았던 것이다. 그의 죽음이 전해졌을 때, 조선인들이 바친 열정은 타의 추종을 불허할 정도였다. 그의 관은 기꺼이 신청한 사람들에게 의해 운반되어 조선의 공동묘지에 매장되었다.

나와는 오랜 교우 관계였다. 그가 없었다면 조선에 대한 나의 작업은 절반도 이루지 못했을 것이다. 조선민족미술관은 그의 노력에 의지할 것이 크다. 그곳에 소장된 많은 물건들은 그의 수집에 의한 것이다.

좀 더 살아 주었으면 훌륭한 일을 많이 이룩했었을 것이다. 그 처럼 조선의 공예 전반에 걸쳐 실무적인 지식을 가진 사람은 없었다. 우리가 함께 계획한 일도 많았다. 절반으로 그와 이별한 것은 유감스럽기 짝이 없다. 그가 없는 조선은 갈 곳 없는 조선과 같이 느껴진다.”고 아쉬워하고 있다.

“야나기들의 민예운동은 조선의 일상 잡기에 의해 찢어진 눈을 일본으로 돌린 데서 태어났다. 일본 민예운동 탄생의 계기가 된 인연을 맺어준 사람이 야나기의 친구인 아사카와 노리타카, 타쿠미 형제가 있었다”고 철학자인

츠루미 슌스케(鶴見俊輔)가 말하고 있다.

야마나시현 호쿠토시 출신의 에미야 다카유키(江宮隆之)의 저서 '백자의 사람'(1994년 출간)이 영화로 되어 2011년 완성해서 화제가 된 지 십여 년이 지났다.

제작 과정 중에 양국에서 우여곡절이 있었으나, 아사카와 타쿠미의 탄생 120년, 서거 80주년이 되는 2011년에 완성 상영되었던 것이다.

최근까지 한일 양국의 젊은이들과 아사카와 타쿠미가 근무했던 서울 임업연구원 직원들조차 관심이 적어 잘 알려지지 않은 존재를 안타까워하는 사람들이 있다. 이 영화 상영을 통해 양국의 청소년들에게 한국의 산과 민예를 사랑하고 한국인의 마음속에 살았던 일본인 아사카와 타쿠미의 시대를 되돌아보고, 아사카와 형제의 업적을 검증해서 서로 배우며, 미래에 복음을 전하는 열매를 수확해야 한다. 성찰을 담으면서 나는 기대를 걸고 있다.

(4)-아베 요시시게의 “청구잡기“에 대하여

“청구잡기“는 1932년 이와나미서점(岩波書店)에서 출간되었다. 수록된 수필은 29편에 이르며, 추도문인 '아사카와 타쿠미를 추모한다'라고 공적을 소개한 '아사카와군의 조선도자기 명고' 2편은 감동과 감탄으로 말로 표현 못하는 글이다.

자신보다 뛰어난 것을 인정하고 존경하는 마음, 훌륭한 우정의 아름다움과 영혼의 진실을 읽을 수 있다.

묘비에 '선진미진(善盡美盡)'이라고 새겨져 있다. 그 인연은 “청구잡기“와의 만남에 의한 것이다. 생전에 한 번도 만난 적 없는 아사카와 타쿠미의 정신을 동경하여 경애한 인생의 뒷처리이다.

아베 요시시게는 자연주의 학파의 철학자이며 칸트 철학 연구자로 알려져 있다. 신제 학습원(學習院)의 원장이 되어 사망할 때까지 재임했으며, 현 일왕 아버지의 청년 시절에도 강의했다.

구제 제1고등학교 재학중에 나쓰메 소세키(夏目漱石), 하타노 세이이치(波多野精一), 다카하마 교시(高浜虚子) 등 문호들의 영향을 받았다. 이와나미 서점을 일으킨 동기의 이와나미 시게오(岩波茂雄)와의 교류는 평생 이어져 이와나미의 『철학총서』를 편집, 전후에는 평화운동에 참여했으며, 이와나미 서점의 『세계』창간기 대표를 맡아 관여했다.

1942년부터 1926년에 걸친 유럽 유학에서 귀국 후 경성제국대학 교수가 되었다. 조선의 문화를 상세히 검토하고 일본인의 조선인 경멸 감정을 타일러, 전쟁 전의 군국주의에 대한 비판, 전쟁 후의 사회주의에 대한 과대 평가에 비판적이었다. 전쟁전 전쟁후를 통해 일관된 리버럴리스트-자유주의자였다.

온고지신(溫故知新), 옛날 이야기를 새삼스럽게 찾아 “청구잡기“ 서문의 요지를 소개한다.

이 책은 1926년 2월 내가 유럽 견학에서 돌아 와 조선에 부임한 이래 약 6년에 걸쳐 그때그때의 심정에 따라 느낀 잡문을 수록한 것이다.

“청구잡기“의 이름은 이 책에 수록된 모든 글이 조선어로 쓰여진 데 비롯되었으며, 청옥은 조선의 아호이자 동쪽의 나라를 뜻하는 말이다.

조선에 건너온 것은 내 일생에서 상당히 큰 변동이지만, 나는 대체로 모든 땅에 애착을 느끼지 않고 대부분의 땅에 아름다움과 호감을 찾을 수 있는 사람인 위에, 경성에는 도쿄이후 오랜만에 알게 된 옛 지식도 있고 처음 알게 된 새로운 지식도 있어, 나의 사생활에는 나 자신에 대한 것 외에는 거의 불만이 없었다.

조선의 자연도 조선의 문화도 그 자체로서는 뛰어나지 않지만, 나는 어떤 자연에도 보편적 혹은 특수한 아름다움이 있는 것을 알고 있고, 또 조선의 문화는 특히 일본 문화와의 관련에서 나의 흥미를 끄는 경우가 많다. 다만 현재 내지인들과 조선인 사이에는 너무나 딱딱한 몇몇 문제들로 가득 차 있고, 그에 깊이 파고 들어 갈 것은 즐거움보다 오히려 고통이 더 많다.

내가 조선에 온 후 큰 슬픔은 지난 봄에 아사카와 타쿠미 군을 먼저 여인 것이다. 나의 이 책으로 인해 내가 보기에 너무 적다고 생각되는 내지인들의 관심을 조선에 조금이라도 돌릴 수 있다면 그것은 뜻밖의 행운이다.

(5)-와즈지 테츠로(和辻哲郎)의 “청구잡기“를 읽는다.

일본적인 사상과 서양 철학의 융합, 어떤 것을 그 자체로는 부정하면서 더 높은 단계에서 살리는 것을 목표로 했던 와즈지 테츠로(1889~1960)가 1933년 제국대학 신문에 1932년 간행된 아베 요시시게의 “청구잡기“를 읽는다는 글을 실고 있다.

와즈지는 윤리학자, 문화역사가, 사상사자, '고도순례', '풍토' 등의 저술로 유명한 일본의 보기 드문 철학자이다.

다음은 와즈지 씨의 “청구잡기를 읽다“의 요지이다.

“청구잡기“는 조선, 만주, 중국의 풍물기와 몇몇 고인의 회고록 및 친구에 대한 소식으로 이루어진 수필집이다.

저자는 이 책의 서문에서 '유유한 관념 세계'를 갖는 기쁨을 이야기하고 있다. 이 책은 이런 마음가짐으로 일관하고 있다.

사람들이 유유하게 바라보는 태도를 가질 수 있는 것은 인간의 다툼에 놀라지 않는 불멸의 강함을 가지기 때문이다. 저자는 중국 거지의 뻔뻔함 속에도 그와 비슷한 것을 인정하고 있다. 한산습득(寒山拾得)은 그 상징이다.

(6) — '인간의 가치' —

아베 요시시게는 그의 저서 '청구잡기'에 '아사카와 타쿠미를 추도하다'를 썼지만, 이것이 1934년 중등학교 교과서 '국어 6' 그리고 근역초(權域抄, 1947년)에 '인간의 가치'라는 제목으로 수록되어 세상에 알려지게 되었다.

“타쿠미씨처럼 올바르게 의무를 중요시하고, 사람을 두려워하지 않고 오직 신만을 두려워하는 독립적이고 자유로운, 관직이나 학력이나 권세나 부귀에 의존하지 않고 오직 그 인간만의 힘으로 노당당하게 살아 내었다. 그러한 사람은 좋은 사람일 뿐만 아니라 훌륭한 사람이다. 인간의 생활을 든든하게 한다. 인류에게 있어 인간이 가야 할 길을 바르고 용감하게 밟았던 사람의 손실만큼 커다란 손실은 없다.” 아베 요시시게가 여기까지 말하게 된 아사카와 타쿠미는 내 마음 속에 보편적 가치로 살아왔다.

“나는 신에게 돈을 모으지 않겠다고 맹세했다”고 했다고 한다. 한 종류의 종교적 안도감을 얻고 자기 자신을 위해, 다른 목적을 위해, 보상을 위해 할 것을 극도로 혐오했던 것 같다고 생각한다. 도덕적 순결에서 비롯된 것일 것 같다.”

약자를 외면할 수 없는 청빈(淸貧)한 사람, 오른손으로 행한 선행을 왼손으로 알리지 않는 행위는 항상 조선사람들의 마음에 녹아들려는 그의 인품이 만들어낸 것이다.

“나쁜 자, 무능한 자, 게으른 자, 비열한 자들의 대부분은 훨씬 높은 봉급을 받아 높은 지위를 누리고 있으나, 타쿠미씨와 같은 사람은 적은 봉급이나 비천한 관직이라도 그 사람에 의하여 그 직분을 귀하게 하는 힘이 있는 사람이다. 타쿠미씨가 그 자리에 있으면서 그 인간적인 힘의 존중함과 강인함을 마음껏 발휘할 수 있었다는 것은 인간의 가치가 상품화되는 이 시대에 얼마나 마음 든든한 일인가. 나는 타쿠미씨를 위해서도 세상을 위해서도 오히려 이 일을 기뻐하고 싶다.”

“타쿠미씨의 일이 씨앗을 뿌려 조선의 산을 푸르게 만드는 일이라고 하면, 한 알의 씨앗을 뿌려 한 그루의 나무를 키워내는 일이 얼마나 유익한 일인가. 타쿠미씨는 '씨앗을 뿌리는 사람'이었다.” “조선인의 생활과 친하게 하고 문화를 연구하여, 1923년부터 야나기 무네요시씨와 노리타카씨와 협력하여 조선민예미술관을 설립한 타쿠미씨의 태도는 참으로 자기 생각이 없었다. 내지인이 조선인을 사랑할 것은 내지인을 사랑하는 것보다 한층 어려운 일이다. 감상적인 인도주의자도 추상적인 자유주의자도 이 현실 문제 앞에서는 금방 낙제해 버린다.”

“타쿠미의 생애는 칸트의 말처럼 인간의 가치는 실로 인간에게 있으며, 그 이상도 이하도 아님을 실증했다. 나는 진심으로 인간 아사카와 타쿠미 앞에 고개를 숙인다.”

나는 사람을 아끼는 글에서 이보다 더 통절하게 진심을 털어 낸 우정의 말을 모른다. 이 문장이 왜 전쟁후에는 교과서에서 사라졌는지. 정치나 경제가 변하면

'인간의 가치' 그 자체까지 변한다는 말인가. 가치는 변하지 않는데 인간이 변하고, 세상의 편익에 따라 변했을 뿐이 아닐까 생각되는데 어떨까.

나는 오늘까지 아사카와 형제에 대한 존경과 흠모, 감사의 마음을 품고 재일 생활을 해 왔다. 나는 어떤 시대에도 '인간의 가치'는 변하지 않다고 믿는다.

저자는 조선의 풍물을 이야기할 때, 자기를 무시해서 풍물 자체의 진한 맛을 드러낸다. 게다가 이 풍물들은 철저하게 저자의 인격에 스며들어 있다.

자기는 무시하면서 동시에 대상으로 자신을 드러나게 된다. 여기에 저자의 풍물기의 묘미가 있다고 생각한다.

혼자 여행하는 마음을 설파하는 것도, 자아에 집착함으로써 나로부터 탈피하여 자연스럽게 놀 수 있는 경지에 이르기 위해서였다.

탈아의 입장에서 이국의 풍물을 이야기할 때 우리는 종종 경이로운 관찰을 접하게 된다. 인간을 둘러싼 식물, 집, 도구, 의복 등의 세세한 형태가 깊은 삶의 표현으로서 거대한 의미를 갑자기 우리에게 보여준다. 풍물기는 그대로 인간성의 표현에 대한 해석이 되고 있다.

저자가 고인이 된 아사카와 타쿠미 씨를 이야기하면서 보여준 비할 데 없는 우정의 표현 또한 마찬가지로 탈자아의 입장에 의해 가능해진 것이다. 특히 사람을 움직이게 하는 것은 아사카와 타쿠미를 애도하는 한 문장이지만, 저자는 여기에 경탄할 만한 한 위인의 모습을 자연스럽게 그려내고 있다.

그려진 것은 어디까지나 이 존경할 만한 산림기술자이지 저자 자신이 아니다. 게다가 우리는 이 한 문장에서 저자 자신과 직접적으로 대화하는 듯한 느낌을 받는다.

유유한 느낌의 세계는 부정을 부정하는 입장에서 자타불이(自他不二)의 경계에 우리를 유인하는 것이다. '거기서 나오는 그 본원의 경지로 돌아가는 일'이다.

(7) —키요사토 은하(銀河)학원에 대한 념원—

한국과 일본 중학교 교과서에 유일하게 소개되고 있는 일본인 아사카와 타쿠미. 그러나 양국 국민에게는 널리 알려지지 않고 있는 인물이다. 한국에서는 업적에 비해 아직 인지도가 낮아 아쉽다.

그러나 아사카와 형제의 삶을 통해 배우면 온고지신, 한일 양국이 함께 배워야 할 오늘을 사는 보편적인 가르침이 있다.

1991년 야마나시현 호쿠토시에 아사카와 노리타카—타쿠미 형제 자료관이 건립되었다. 그 전 해에 구 다카네초부터 작품과 자료의 기증 요청이 있었다.

내 소장품이었던 인간 국보인 유해강(柳海剛)과 지순탁(池順鐸)의 청자, 백자 등을 포함한 한국 민예품 등 67 점을 기증했다.

그때 기증 작품을 전시하는 것으로 끝나지 않는 사업에 활용해 주면 좋겠다. 자료관은 공립박물관으로서의 역할을 다하는 연구기관이어야 한다. 다양한 분야의 선구자를 길러낸 야마나시의 풍토와 역사, 문화를 배우는 '아사카와학(學)'의 학술 연구기관이 되어 사회에 환원해 주기를 바란다.

시민교육, 특히 차세대 청소년 교육 프로그램을 통해 한일의 상호이해, 우호 친선 교류를 촉진하고 국제친선에 기여해야 한다고 말했다.

한일의 상호 불신을 해소하기 위해서는 사람과 사람의 생생한 만남과 마음의 교류에 달려있다는 신념에서이다.

기증 후 내가 할 수 있는 일, 도움이 될 수 있는 일이 무엇일까 계속 고민하다가 도달한 것이 사립학원인 키요사토 학원 은하학원의 설립이었다.

1961년 처음으로 야쓰가타케(八ヶ岳) 산기슭의 키요사토에 내렸던 나는 그 웅장한 자연에 신비로움을 느껴 소름을 끼쳤다.

사립학교인 키요사토 은하학원의 개강 인사말은 항상 이 위대한 자연의 대기(大氣)에서 배울 것이 있다고 강조하고 있다. 그 생각은 키요사토에 내렸을 때의 감동과 영감이 생생하게 살아있고 지속되고 있기 때문이다.

나의 호는 '동강(東江)'이다. 히말라야에 내린 눈과 비가 강물이 되어 흘러 큰 강이 된다. 그 시내가 강이 되어 바다로 흘러 간다. 해류는 흘러가고, 그 흐름은 기류가 되어 하늘에서 정화된다. 유구하게 반복되는 자연의 섭리는 히말라야에 내려 와 순환한다. 나는 고등학교 졸업식 때 기록집에 '대하처럼' 살다고 적었다. 우주의 섭리에 따라 살아가는 나의 철학을 표현한 것이다. 일본(동쪽)의 큰 강이 되겠다는 재일의 기개이다.

나는 부모님 고향인 영암 왕인 박사묘(왕인박사 유적지는 전남도 기념물 제 20 호)에 서서 서쪽으로 펼쳐진 하늘을 우러러 본다. 어느 때는 느긋하게 대륙에서 물려오는 구름의 움직임에 넋을 잃고 바라본다. 이 대기의 흐름 끝에 내가 태어나 살고 있는 일본열도가 있다는 사실에 감회가 새롭다. 또 벚꽃이 피는 계절에는 내가 살고 있는 가와구치시(川口市)에 있는 신사(神社) 안의 벚꽃이 왕인묘의 벚꽃길과 같은 시기에 피는 것을 보면, 벚꽃을 사랑하는 봄은 일본과 한국의 거리를 잊고 한마음 한뜻인 것을 실감한다.

또한 영암의 국립공원 월출산은 기(氣)의 산이라고 불린다. 히말라야의 기류가 고비사막, 한반도를 남하하여 월출산에 흘러가기 때문이라고 한다. 영암 사람들은 그 기운을 강하게 받고 있다고 한다. 나에게도 그 기운이 흐르고 있다고 생각할 것이 자연스럽다. 키요사토에는 그 기운이 충만하고 있다.

(8) —키요사토 은하학원에무엇을 배울 것인가? —

20대부터 키요사토 땅에서 여가를 보내게 되었다. 이 지역의 풍토 속에서 삶을 살았고, 곧 85세가 된다. 이 땅에 내가 동경하고 존경하는 위인이 있었기 때문이다.

이 세상에 인간애를 가르치고 베풀어 준 선현들은 재일로 살아가는 나의 스승이자 삶의 지표였다. 한 인간으로서 진리의 길을 개척한 선현의 발자취는 일본 풍토에서 숨 쉬고 있으며, 현대를 살아가는 사람들 마음의 뿌리에 일본의 풍토와 한국의 풍토를 겹쳐서 보이는 것들이 재일에게 있다고 생각했다.

사람을 형성할 것은 '사람의 진실'이라고 생각한다. '사람의 진실'이 자랑스럽고 구도적(求道的)이면서도 풍토, 사람도 그에 걸맞는다. 그러나 사람의 마음이 흐트러지고 황폐하면 풍토와 사람도 타락하지 않을까. 야쓰가타케 산기슭, 키요사토의 지역 풍토 속에서 태어난 정신, 아사카와 형제의 삶의 방식에서 배울 것의 의의와 의미를 찾고 싶다는 생각을 하게 되었다.

키요사토 은하학원에서 무엇을 배울 것인가. 배우는 의미, 배우는 즐거움은 삶 그 자체이니 그 기본이 될 '평생학습'에 대해 생각해 보았다.

일반인(주민)은 자신을 위해, 지역발전 공헌을 위해 공부해 가자. 직업인은 직업의식 수준 향상을 위해 공부해 가자. 평생 건강을 유지하고 활기차게 살아가기 위해, 세대를 넘어 몸과 마음을 키우기 위해 배우자. 호기심을 가지고 자신을 닦아 평생 성장하고 싶다, 선하게 살려고 노력하는 내가 되고 싶다. 그 배움의 본능은 누구에게나 있기 때문이다.

배움이 성숙해짐으로써 진정한 나를 확인하고 자신의 존엄성을 찾게 된다. 자신을 아끼고 소중히 여기는 것은 거기서 상대를 인정하는 인간관계를 만들고, 사람을 사랑하는 것에 이어진다. 그런 사람들이 만들어가는 성숙하고 똑똑한 사회를 만들고 싶었다.

서로 배우고, 서로 돕고, 함께 살면서 서로를 높여주는 자기 연수를 쌓아 가자. 다양한 가치관 속에서 스스로 배우고 함께 배운다는 것은 스스로 결정하는 것이며, 평생학습은 곧 자기교육이다. 배움을 즐기는 문화를 창조하고 싶다.

(9) —아사카와 형제에게 드리는 유덕의 비석—

나는 2006년부터 사학 키요사토 은하학원을 20회 열었다. 지금까지 배운 수강생은 1,000명을 넘는다.

함께 배우고 좋은 기억을 되새기며 선인들의 덕을 추모하고 회고할 것은 상호이해가 깊어지고 국제친선의 밑거름이 된다.

한국에서는 한국인들이 무덤을 지켜주고 있으며, 생탄지인 야마나시현 호쿠토시에서도 현창받게 되었다. 양국에서 사랑받는 인물이면서도 고향에 현창비가 세워지지 않고 있는 것을 나는 오랫동안 아쉬워하고 있었다.

폴 러쉬 박사는 '키요사토의 아버지'로 불리며, 현창단도 세워져 존경받고 성단에도 모셔져 오래 된다.

나는 1997년 아사카와 형제도 언젠가는 성단에 모셔질 인물이라고 1997년 아사카와 형제를 추모하는 모임 총회에서 강연한 적이 있다. 그 이후 언젠가 바위에 새겨 동상을 만들고 호쿠토시에 현창비를 드리려고 20여년 동안 구상을 가다듬어 왔다.

2021년은 아사카와 타쿠미의 탄생 130주년, 서거 90주년이 되는 해로, 6월 13일 아사카와 노리타카-타쿠미 형제를 추모하는 모임 결성 25주년을 기념하여 '경애와 감사의 마음을 담아'라는 문구를 새긴 '노당당'이라는 진문(陣文)을 달고 형제의 동상 조각 현창비를 생가터에 세우게 되었다.

비석의 디자인은 오층탑을 형상화한 5층(5단)이다. 비석은 우에노(上野)공원의 왕인박사비를 본받아 하층 4단은 흰 화강암을 연마하였다. 상층은 한국산 곡성석을 닦아 광택을 내고 조각가 하리야마 히로후미(張山裕史)씨가 제작한 아사카와 형제의 조각을 배치했다. 비문은 고후시의 서예가 사야마(狹山) 우에마츠 나가오(植松永雄)의 휘호에 의한 '노당당'이다.

아베 요시시게의 “청구잡기“ '아사카와 타쿠미씨를 추도하다'의 문장 속에 있는 '그 사람의 힘만으로 노당당하게 살아 내었다'에서 '노당당'이라는 글을 현창문으로 채택해서 새겼다. 2023년에 호쿠토시는 경기도 포천군과의 자매도시 체결 20주년을 기념하여 자료관 앞 광장을 정원으로 만들어, 제가 기증한 석재로 '아사카와 노리타카-타쿠미 형제 기념공원 기념비'를 건립했다.

명실함께 성단의 꿈이 정몽(正夢)이 되었다. 아사카와 형제 위덕의 은혜이다. 어제부터 오늘, 오늘부터 내일에 이어지는 고귀한 계속. “옛날에 심었던 묘목이 크게 자라난다. 오늘 심는 묘목은 미래의 대목”이 될 것이다. 한일 우호의 연대를 맺는 교류의 광장이 되기를 영원히 기원한다.

テレビ山梨「やまなし偉人伝～浅川兄弟～」(2024年10月放送予定)

河正雄へのインタビュー

2024年6月9日 浅川伯教・巧兄弟記念公園前で

(Q)浅川兄弟との出会いは？

(A)昭和33(1958)年秋、秋田工業高校3年生の時です。秋田県立図書館で読んだ安倍能成著『青丘雑記』(岩波書店 昭和7年刊)に「浅川巧さんを惜む」と「浅川君の『朝鮮陶磁名考』」の文を読んで浅川巧さんを知りました。その文中に「その人間の力だけで露堂堂と生きぬいて行った。」と浅川巧の死を惜しまれ、「露堂堂」と生きた浅川巧さんを慕うようになりました。

(Q)浅川兄弟の功績、魅力は？

(A)浅川兄弟の「功績」は数多くあります。

第一に下位の林業技手として試験苗圃と試験林の造成、養苗と造林の研究をされ、朝鮮カラマツ、朝鮮五葉松など30余種程の養苗の研究成果をあげ、朝鮮の緑化に尽したことです。

第二に朝鮮の工芸を研究し『朝鮮の膳』『朝鮮陶磁名考』などの著書を残したことです。

柳宗悦の朝鮮の美への開眼を促し民芸活動に寄与された。朝鮮の工芸、朝鮮陶磁の歴史を調べ、その美を世に伝えました。

浅川兄弟の「魅力」は朝鮮文化、朝鮮語を学んで朝鮮を理解し消化した人間性、境界や壁を作らず隣人を愛した、純粹無垢の人間力に魅力と憧れを感じます。

(Q)浅川巧が朝鮮の言葉を話し、民族衣装をまとった理由は？

(A)人と近く親しくなるには全て挨拶から始まります。その挨拶が接する国や隣人の言語で行えば距離は縮まり、親しくなり情が生まれます。朝鮮の衣で身を包み、朝鮮の食事を摂り、衣食住を共にすることに喜びと幸せがあることを教えてくれた人でした。

(Q)なぜ、韓国の人は浅川巧の墓を大切に守り続けたのか？

(A)浅川兄弟は、その人間愛で他者への敬愛を身を以て接する生活を営みました。朝鮮の人も、その人間力と人間性を学び、情を以て答えたのです。

同胞であり、兄弟であり、血を分け合った分身、朝鮮を愛した者の墓であるからでしょう。

(Q)浅川兄弟の存在が今、私たちに訴えることは？

(A)戦後、韓国でも日本の故郷でも存在を忘れられていた人です。朝鮮の山林再生、工芸や陶磁の復興という浅川兄弟の功績が時代を超えて評価され、露堂堂と甦りました。

隣人、隣国、一衣帯水の韓国と日本の関係は有史以来のものです。お互いに交流し、理解し合い、学び合い、善隣友好の挨拶と情を交わすことが第一義であることを訴えています。

愚の繰り返しは不幸を招くと歴史が教えています。露堂堂と生きた人からのメッセージは今も生きた教訓であると改めて思います。

(Q)河正雄さんが日ごろ感じていることは？

(A)これまでの浅川兄弟を顕彰する活動が「浅川学」となって実るよう、国際セミナーやシンポジウムなど定期的に関き、顕彰意義を学術的に高めてほしい。

浅川兄弟を偲び顕彰する行事を一段上げた友好祭、文化祭、国際的な行事になることをマンネリ、尻すぼみにならぬよう祈念しています。

浅川巧生誕130年 没後90周年記念

温故知新

浅川伯教・巧兄弟顕彰碑建立



除幕式

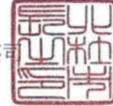
浅川伯教・巧兄弟資料館前広場

2021年6月13日(日)

北杜学術第 108 号
令和 3 年 4 月 3 日

河 正雄 様

北杜市長 上村 英司



寄付採納受諾書

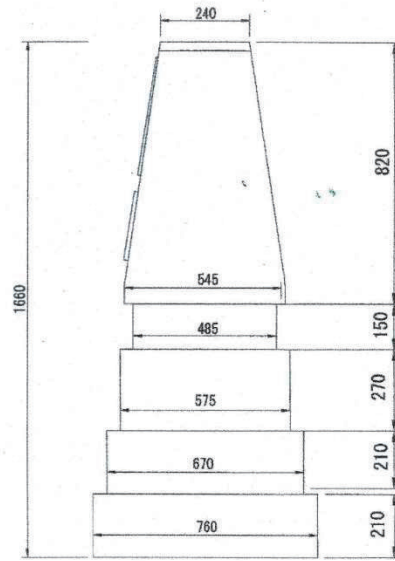
令和 3 年 4 月 1 日付けでお申し出のありました、下記の寄付につきましては、
受諾させていただきます。
貴殿の御厚意に心から感謝申し上げます。

記

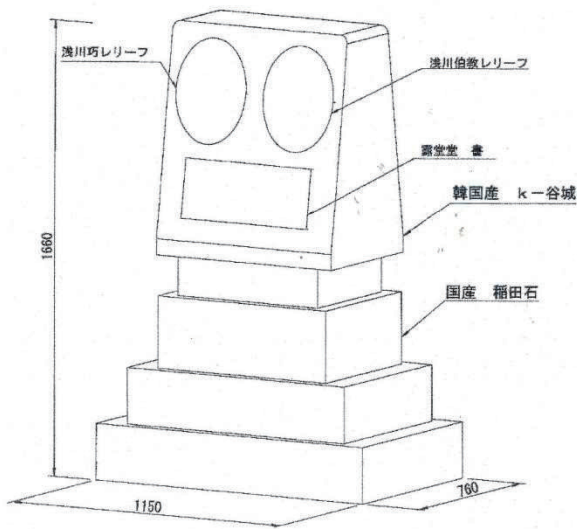
寄付の内容	寄贈品	浅川伯教・巧兄弟顕彰碑
	大きさ	幅 1150 mm 奥行 760 mm 高さ 1660 mm
	材 質	記念碑 ブロンズ
		台 石 韓国産 K-谷城 国 産 稲田石



前面



側面



立体



裏面

デザイン：河正雄
 施工：有限会社 関戸石材

レリーフ



浅川 巧



浅川 伯教

ブロンズ 38×30 cm 2021

浅川伯教・巧青銅刻画家作者経歴

張山 裕史(Hariyama Hirofumi)

1969年7月25日生

沖縄県立芸術大学美術工芸学部美術学科彫刻専攻入学

沖縄県立芸術大学美術工芸学部美術学科彫刻専攻卒業

沖縄県立芸術大学美術工芸学部彫刻専攻研究生

沖縄県立芸術大学美術工芸学部彫刻専攻研究生修了

沖縄県立開邦高校非常勤講師 1994年3月まで

池田美術株式会社(埼玉県川口市在)入社

張山美術鑄造所開業 〒509-7122 岐阜県恵那市武並町竹折 8992

沖縄県立芸術大学非常勤講師

名古屋学芸大学非常勤講師

名古屋造形大学非常勤講師



1919(大正8)年3月頃の家族写真

兄伯教が彫刻家をめざし日本に戻るときに京城で撮影した

記念写真。前列左から、伯教妻たかよ、伯教次女恵美子、

伯教長女牧栄、母けい、巧妻みつゑ、巧長女園絵。後列左、

兄 伯教、巧

母けいは、1917(大正6)年に故郷に帰り、

屋敷・田畑を整理し、菩提寺 兩宝山泉龍寺(曹洞宗)に

先祖代々の位牌を新しくつくって納めています。

故郷に戻らない決心でした。

書



黒御影版 55.0×23.0 cm 2021

■ 峡山 植松永雄 略歴

- | | | | |
|-----------------------|-------------------------------------|------------|---------------------------------------|
| 1940年 | 北杜市白州町白須生 | 2000年(60歳) | 中国歴訪(上海、西安、敦煌、ウルムチ、トルファン) |
| 1959年 | 県立峡北高校卒業(現山梨県立北杜高等学校) | 2003年(63歳) | ヨーロッパ歴訪(イタリア;ローマ・ナポリ・ボンペイ) |
| 1963年 | 二松学会大学文学部卒業 | 2004年(64歳) | 台湾歴訪(故台北、故宮博物院) |
| 1964年-2001年 | 県立高校書道教諭(身延高、峡北高、甲府西高、盲学校、中央高) | 2004年(64歳) | ヨーロッパ歴訪(スイス;チューリッヒ・アルプス) |
| 1968年(28歳) | 第1回個展(甲府) オリエンタルホテル画廊 | 2004年(64歳) | NHK BS テレビ出演「おーい日本・わたしのすきな山梨県」 風林火山揮毫 |
| 1972年(32歳)-1974年(34歳) | 現代書百選出品(東京上野都美術館) | 2004年(64歳) | 第5回個展(甲府) 桔梗屋花葉亭画廊 |
| 1972年(32歳) | 植松峡山・小笠原環山現代書二人展(甲府県民会館) | 2005年(65歳) | アフリカ歴訪(エジプト;カイロ) |
| 1976年(36歳) | イタリアミラノ展出品(ミラノ中央市民文化センター作品所蔵) | 2006年(66歳) | ヨーロッパ歴訪(ギリシャ;アテネ・デルフィー) |
| 1976年(36歳) | 信玄公祭り 山日紙上に約10年題字揮毫 | 2007年(67歳) | 第6回個展市川三郷町趙大門碑林公園「風林火山」展 |
| 1978年(38歳) | 中国歴訪(広州、桂林、韶山、長沙) | 2007年(67歳) | 白州六人展 白州町金精軒ギャラリー |
| 1983年(43歳) | 第2回個展(甲府) 県民会館地下画廊・教壇20周年記念展 | 2010年(70歳) | 峡山 植松永雄書50年展(山梨県立美術館) |
| 1985年(45歳) | 第3回個展(甲府)甲府西高校 蛇笏生誕100周年記念展 | 2012年(72歳) | 韓国霊岩郡立河正雄美術館作品収蔵 |
| 1988年(48歳) | 中国歴訪(北京、上海、西安、成都) | 2016年(76歳) | 光州市立美術館 霊岩郡立河正雄美術館訪問 |
| 1993年(53歳) | 第4回個展(甲府) 県民会館地下画廊・教壇30周年記念展 | 2018年(78歳) | 光州市立美術館分館河正雄美術館 李萬煥展開幕式参席 |
| 1994年(54歳) | 中国歴訪(北京、上海、西安、成都) | 2018年(78歳) | 身延山松井坊作品収蔵 |
| 1995年(55歳) | ヨーロッパ歴訪(ドイツ;ベルリン、フランス;パリ、イギリス;ロンドン) | 2018年(78歳) | 秋田県仙北市立角館町平福記念美術館作品収蔵 |
| 1995年(55歳) | 白州三人展 白州町金精軒ギャラリー | 2018年(78歳) | 書・陶二人展 ノリタケの森ギャラリー |
| 1998年(58歳) | 植松峡山・平岡陶進二人展(甲府) 県立美術館 | 2019年(79歳) | 浅川巧墓参 ソウル忘憂里墓地 |
| | | 2021年(81歳) | 浅川伯教・巧兄弟顕彰碑揮毫 |
| | | 2021年(81歳) | わらび座作品収蔵 |
| | | 2021年(81歳) | 田沢湖畔故郷の碑揮毫 |

一碑銘・露堂堂(明歴歴露堂堂)について一

明らかにはっきりと現れていて少しも隠すことがないという仏教極致の句である。「巧さんのやうな正しい、義務を重んずる、人を畏れずして神のみを畏れた、獨立自由な、しかも頭腦の勝れて鑑賞力に富んだ人は、實に有難き人である。巧さんは官位にも學歷にも権勢にも富貴にもよることなく、その人間の力だけで露堂堂と生きぬいて行つた。かういふ人はよい人といばかりでなくえらい人である。かういふ

人の存在は人間の生活を頼もしくする。殊に朝鮮の様な人間生活の稀薄な所では一層さうである。かういふ人の喪失が朝鮮の大なる損失であることは無論であるが、私は更に大きくこれを人類の損失だといふに躊躇しない。人類にとって人間の道を正しく勇敢に踏んだ人の損失ぐらゐ、本當の損失はないからである。」

(安倍能成著『青丘雜記』より 1932年 岩波書店刊)

浅川巧生誕 130 周年・没後 90 周年に寄せて

東江 河正雄

—露堂堂と生きる—

2021 年の年明けは昨年末からの新型コロナウイルス禍が収束せぬままに幕を開けた。4 月 25 日には新種、変異株ウイルスなどで第 4 波による 3 回目の緊急事態宣言が発出し、事態は収まる気配を見せていない世相である。

私が生きた 82 年間には第 2 次世界大戦、祖国朝鮮半島に於ける南北戦争、オイルショック、バブル崩壊、リーマンショック、阪神淡路大震災、東日本大震災と暇ない災禍があった。

世の中とはこういうものだと、平常心を以って何とか潜り抜けて来ることが出来たのは、幸せな人生だったとは言える。

2021 年、私の身边に起きた数々の慶事は、災禍中であれ露堂堂と生きれば平常心の源になるという哲学の支えからであると思う。私の旅の途中の慶事を分かち合い、コロナウイルスの災禍を祓いたいと思う。

—浅川伯教・巧兄弟顕彰碑—

浅川巧(1891 年－1931 年)は、山梨県北杜市高根町に生まれた。山梨県立秋田農林学校卒業後、4 年余り秋田県大館営林署で農林技手として務めたが、兄伯教と前後して朝鮮に渡る。

農林技手として植林緑化の普及に努める傍ら、失われようとする朝鮮の美の発掘に貢献した。植民地下にあった朝鮮に生き愛された稀有の日本人である。30 数年前までは浅川巧の生地山梨県北杜市ですら彼の事は知られていなかった。

1959 年、秋田工業高校 3 年生の時に、安倍能成著『青丘雑記』の「浅川巧さんを惜む」という文を読み、浅川巧に憧れと感謝の念を抱いた。

秋田工業高校時代に浅川巧を知った事から、浅川巧は私が在日として生きる為の人生哲学を学んだ敬愛する日本人の一人である。人間誰でも自分だけの隠し田を持ちたがるものだが、朝鮮人と向き合った浅川巧

は隠し田など一切持たなかった。

自分のルーツが高句麗人だと思っていたらしい浅川巧は高句麗人の血が故郷の朝鮮へと、私を呼んでいと告白した事でも朝鮮への愛の深さがわかる。歴史的に植民地下の難しい時代に、両国の故郷でも受ける苦難を自分の生涯と代わる愛の対象としたが、時代は違えどもディアスポラである在日二世の私には、理解共感する世界人である。

浅川巧の名著『朝鮮陶磁名考』(1931 年刊)の末尾にある「民衆が目覚めて、自ら生み、自ら育ててゆくところに全ての幸福があると信じる」の文は、その愛の証である。

朝鮮松の露天埋蔵法による種子の発芽、養苗開発など、その業績は光る。朝鮮民族美術館建設の推進、朝鮮陶磁器や工芸の研究、朝鮮の膳などの工芸美を考察した著書を残し、韓民族の美意識と魂を民芸と植林の領域で我々の自尊心を高めてくれた。

日本民芸館の創立者柳宗悦(1889 年 - 1961 年)は『朝鮮陶磁名考』の序文に「どんな著書も多かれ少なかれ先人の著書に負うものである。だが此著書ぐらい、自分に於いて企てられ、又成された物は少ない」と記した。

「柳宗悦や民芸運動は朝鮮の日常雑器によって開かれた眼を、日本に転じる所から生まれた。日本の民芸運動の誕生の機縁となった結びつきを作った人に柳の友人としての浅川伯教、巧兄弟があった」と哲学者鶴見俊輔が述べている。

山梨県北杜市出身の江宮隆之著『白磁の人』(1994 年刊)の映画化がなされ、2011 年に完成し全国で上映会が催されている。

制作過程では両国で紆余曲折はあったが、浅川巧生誕 120 周年・没後 80 周年を記念する映画が上映出来て喜んだ。

それまで韓日両国の若人達や、浅川巧が勤務していたソウルの林業研究院の職員等も関心が薄く、知られていない存在を憂える人々がいた。この映画上映を通して、両国の青少年達に韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心の中に生きた日本人・浅川巧の時代を振り返り、その業績を顕彰し今こそ学び合って我々の未来に福音をもたらす果実を収穫せねばならない。

日韓両国の中学校教科書に唯一、浅川巧の人となりで紹介されている。そして 2015 年には韓国の発展に寄与した世界の 70 人の 1 人に浅川巧が選出され「浅川巧の心」が両国国民の心に確かに生きていることは

幸いである。

私は 2006 年より私塾清里銀河塾を 18 回開催し、これまで学んだ塾生は 1000 人を超えている。

共に学んで善き追憶を辿り、先人の徳を慕い回顧する事は、相互理解が深まり国際親善の糧となる意義がある。

韓国では韓国人に墓は守られ、地元山梨県北杜市でも顕彰され、両国から愛されている人物でありながら、顕彰碑が建立されていない事を長年淋しく思っていた。2021 年は私が敬愛する浅川巧の生誕 130 周年没後 90 周年記念の年に当たる。

ポール・ラッシュ博士は「清里の父」と呼ばれ、顕彰碑も建って敬われ、聖壇に祀られて久しい。

私は浅川兄弟もいつの日にか、聖壇に祀られる人物であると 1997 年の浅川兄弟を偲ぶ会総会で講演をした事がある。それ以来、いつの日にか石に刻みブロンズ像を配し北杜市に顕彰碑を贈ろうと 20 数年間、構想を温めていた。

私は 2021 年 6 月 13 日、浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会結成 25 周年を記念して、“捧ぐ 敬愛と感謝を込めて”私の座右である「露堂堂」の碑文を添え、兄弟のブロンズレリーフの顕彰碑を生誕地に建立するに至った。2019 年 11 月、北杜市市民栄誉賞を受けた報恩と 63 年来の夢が叶うことになった良縁に感謝してである。

碑のデザインは五重塔をイメージする五層(五段)。

碑石は上野公園の王仁博士碑に倣って下層四段は国産の稲田石を割り肌仕上げ。上層は韓国産谷城石を本磨きにして、彫刻家・張山裕史氏の作である浅川兄弟レリーフを配した。碑文は甲府市の書家・狭山植松永雄氏の揮毫による書「露堂堂」である。

安倍能成著『青丘雑記』「浅川巧さんを惜む」の文中にある「その人間の力だけで露堂堂と生きぬいて行った」から顕彰文に採用し、刻むこととなった。

北杜学第544号
令和3年11月28日

河 正雄 様

北杜市長 上村 英明



寄付採納受諾書

令和3年11月26日付けでお申し出のありました。下記の寄付につきましては、受諾させていただきます。
貴殿の御厚意に心から感謝申し上げます。

記

寄付の内容	寄贈品	浅川伯教・巧兄弟 石膏作品2点
	大きさ	38×30cm
	作者	張山裕史
	制作年	2021年



浅川伯教・巧兄弟顕彰碑

この顕彰碑は、浅川巧生誕130年（没後90年）にあたり、河正雄氏から寄贈されたものです。

高校生の時に浅川巧を知った河氏は、巧のように生きたいと願い、韓日の友好に多大な貢献をされました。また兄弟のふるさとである北杜市をこよなく愛し、本市の発展にも寄与されています。

碑石のデザインは、五重塔をイメージし、下層四段は、国産の稲田石を割り肌仕上げとし、上層は韓国産谷城石を本磨きにして、彫刻家の張山裕史氏が製作した兄弟のレリーフが配されています。

碑銘（峽山・植松永雄書）には河氏の座右の銘であり、安倍能成が巧の生き方を一言で表した「露堂堂」の文字が刻まれ、「一切の虚飾を捨て、人として正しくまっすぐに生き抜いていくこと」への想いが込められています。

2021（令和3）年6月吉日

北杜市教育委員会



除幕式の記念写真（2021年6月13日）

国際親善の精神、後世に

日本統治下の朝鮮半島で、白磁など朝鮮民芸の研究や山野の緑化に貢献した浅川巧と、兄・伯教の兄弟を顕彰する碑が、2人の故郷、北杜市(旧高根町)に建立される。在日韓国人2世の実業家、河正雄さん(82)が寄贈した。日韓関係が冷え込む中、朝鮮の風土や文化を愛し、現地の人々からも愛された浅川兄弟をしのぶ河さんは「国や民族が違っても地域に根を下ろして生きる基礎、精神を伝えていきたい」と思いをはせる。

【梅田啓祐】

在日韓国人2世 河さん

今年が巧の生誕130年、没後90年の節目に当てることから、兄弟の遺徳を伝えようと北杜市に寄贈した。



河正雄さんが寄贈した浅川兄弟の顕彰碑。河さん提供



顕彰碑を寄贈した河正雄さん。北杜市で

と記した石版を設置。良跡を追うきっかけや、在日として生きる上での哲が表れ、悪いことをすれば悪い結果、日と学になつた。「(浅川に)ば悪い結果が起る」と憧れと感謝の念を抱いた。歴史的に植民地下のいう意味の禅語で、高校時代に出会ったこの言葉が、河さんが浅川巧の足



浅川巧



浅川伯教

◇浅川兄弟

北杜市(旧高根町)出身で、弟の巧(1891〜1931年)は1914年、兄の伯教(1884〜1964年)に続き朝鮮半島に渡航。朝鮮総督府の林業試験場で山の緑化に取り組み、兄と陶磁器や工芸品を研究し現地でも慕われた。巧は40歳で亡くなりソウル市の共同墓地に埋葬された。

てくれた」と振り返る。

河さんは兄弟らの功績を敬い、清里にも居を構え、美術品収集家として地域に根ざして活動。北杜市の「浅川伯教・巧兄弟資料館」にも陶磁器や民芸品などの関連資料を提供してきたが、地元で顕彰碑がないことを数十年前から残念に感じていた。今回「自分も高齢となり、今こそシンボルとして碑をのこさねば」と建立を決意した。

顕彰碑は資料館前に設置され、13日に除幕式を予定していたが新型コロナウイルスの感染拡大に伴い延期になった。上村英司市長は取材に「河さんが日本と韓国との絆を築いていただいたことに心から感謝している。浅川兄弟の功績と精神を未来へと継承していきたい」とコメント。河さんは「兄弟の顕彰碑を通して、多文化共生や国際親善の精神、地域に根付いて精いっぱい物事に取り組みたいが後世に伝わればうれしい」と話し、コロナ収束後の除幕を心待ちにしている。

「毎日新聞」(2021年6月12日)

植民地時代の朝鮮に生き、愛された日本人

浅川伯教・巧兄弟資料館前広場に顕彰碑建立



(右から)河正雄さん、尹昌子夫人、長谷川誠・北杜市教育委員会学術課長、比奈田義彦・浅川伯教・巧兄弟資料館館長

浅川巧は山梨県北杜市高根町出身で、植民地時代(1910)1945の朝鮮半島で生活。朝鮮人の立場で朝鮮を捉えようとした数少ない日本人だった。今年浅川巧生誕130年、没後90年、それを記念して在日2世の業績家・河正雄さん(光州市立美術館名誉館長)が、同町の浅川伯教・巧兄弟資料館前広場に、同町の浅川伯教・巧兄弟資料館館長河正雄さんと書道の思いこいで書写してもらった。

浅川巧(1891-1981)は、山梨県北杜市高根町に生まれ、山梨県立農林学校卒業後、4年秋田県大館市で農林技術士として勤務したが、兄伯教と別れて朝鮮に渡る。農林技術士として植民地化の普及に努めるが、失われようとする朝鮮人の苦境に共感し、植民地下の朝鮮人に愛された日本人として知られる。1950年、秋田県立高校の校長に就任し、安藤能成著「青丘雜記」の浅川巧を惜しむ。2011年に

浅川巧生誕130周年、没後90周年に寄せて

河正雄(光州市立美術館名誉館長)

の難しい時代に、両国の故郷でも愛される困難を自分の生活と代わる愛の対象としたが、時代は違えどもアイヌがうである。在日二世の母に、理解共感する世界人である。浅川巧の名著「朝鮮人愛」(1931年刊)の末巻にある「民衆が自覚して、自ら生み、自ら育ててゆくことに全ての幸福がある」との一文は、その愛の証である。朝鮮人の愛護法による種子の送付、善田開発など、その業績は光る。朝鮮民族芸術推進の推進、朝鮮陶磁器の工

芸の研究、朝鮮の贈答の工芸を考察した著書「産民愛」(1980)と「産民愛と魂を民族と種族の領域に我々の自尊心をめぐめてくれた」。

日本民芸館の創立者・柳宗悦(1889-1961)年「朝鮮陶磁器名書」の序文に「日本人著者も多かれ少なかれ先人の著書に負つたものである。だが此著書は、自分だけに於いて企てられ、又成された物は少ない」と記した。

来に福音をもたらす果敢を取捨せねばならない。韓日両国の中歩校教師書に唯一、浅川巧の人となりが紹介されている。そして15年には韓国の発展に寄与した世界の70人の一人に浅川巧が選出され「浅川巧の心」が韓国国民の心に響かして生きていくことである。私は06年より秋田清里銀河路を18回開通し、これまで半んだ歩は100人を超えている。共に歩んで善き道徳をたどり、先人の徳を慕い回帰する事は、相互理解が深まる国際協力の糧となる道徳である。

韓国では韓国人に慕は守られ、地元山梨県北杜市でも顕彰され、両国から愛されている人物でありながら、顕彰が建立されていなく手長年淋しく思っている。21年は私が敬愛する浅川巧の生誕130周年・没後90周年記念の年に当たる。ポル・ラッソン博士は「潘里の父」と呼ばれ、顕彰碑を建てて欲しい、聖壇に祀られて欲しい。私は浅川兄弟もいつの日か、聖壇に祀られる人物である97年の浅川兄弟を偲ぶ会総会で講演をした事がある。それ以来、いつの日か行に刻みフロンズ像を配し北杜市に顕彰碑を贈ろうと数年間、構想をあためていた。

21年6月13日、浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会総会25周年を記念して、構想を込めて感謝の込め「産民愛」(明らかにはできずとも)と掲げて、少しも辱すことがないといふ植民地の句の漢文を添え、兄弟のフロンズレ

1つの顕彰碑を生誕地に建立するに至った。16年11月、北杜市民芸館を愛した顕彰と63年来の夢が叶うことになった良縁に感謝してである。

碑のデザインは五重塔をイメージする五層(五段)の碑石は上野公園の王仁博士に成って下野四段は国産の福田石を割り肌仕上げ、上野は韓国産谷城石を本階にして、彫刻家・東山裕史氏の作である浅川兄弟レリーフを配した。碑文は甲府市の書家・狭山福永雄氏の揮毫による書「産民愛」である。

安部龍成著「青丘雜記」浅川巧さんを惜しむの文中にある「その人間の方だけては愛され生き抜いて行つた」から顕彰文に採用し、刻むこととなった。

「東洋経済日報」(2021年6月18日)

国際親善の精神 次世代に

川口市在住で在日韓国人2世の実業家、河正雄さん(81)が、日本統治下の朝鮮で民芸と自然を愛し、人々から敬愛された浅川伯教、巧兄弟の顕彰碑を、2人の故郷の山梨県北杜市に寄贈した。河さんは「浅川兄弟は国籍・民族を超え国際親善を実践したヒーローマニスト。次世代に伝えてほしい」と話した。

(菊地正志)

浅川兄弟は山梨県北巨摩郡甲村(現在の北杜市高根町)出身。兄の伯教(1884～1964年)は朝鮮陶磁史の研究に生涯をささげ、兄の影響を受けた弟の巧(1891～1931年)は白磁や膳など民芸品に魅せられ、名著「朝鮮の膳」を出版。後の民芸運動に結び付いた。また巧は、林業技師として植林の育苗法を開発。荒廃した山林の緑化に尽力した。

巧は多くの人々に惜しまれて40歳で死去。悲しんだ朝鮮の人々は泣きながら、われもわれもこのつぎを担いたいという。

■ 人生の師

河さんが巧を初めて知ったのは高校3年のとき。哲学者で後に文部大臣になる安倍能成が書いた巧の追悼文を読んで感動。失業と病気で失意のどん底にあった青年時代にも、巧の生き方に励まされた。「巧は人生の師

川口の在日2世 河正雄さん

であり、目標となった。河さんはその後、北杜市内に第2の居宅を設け、浅川兄弟の顕彰活動をスタート。兄弟にゆかりの白磁など100点余りを北杜市に寄贈したほか、2006年から19年まで18回にわたる、私塾「瀟星銀河塾」を主催。日本とアジアの交流を担う若者を育ててきた。

■ 正々堂々と

顕彰碑は台座が日本の稲田石製、上部が韓国の谷城石製で、高さ約1・7メートル、幅約1・2メートル。「浅川伯教・巧兄弟資料館」前の敷地に建立された。巧の生誕130年、没後90年となる今年、河さんが長年の夢をかかなせた。石碑には浅川兄弟の肖像と「露臺」の文字が刻まれた。露臺は、正々堂々と生きることの大切さを示す神の教え。安倍能成の著「青丘雜記」には「そ

贈る顕彰碑の兄弟浅川 朝鮮の民芸研究



浅川兄弟の顕彰碑を寄贈した河正雄さん(右)と妻の尹昌子さん＝6月13日、山梨県北杜市高根町の「浅川伯教・巧兄弟資料館」前

の人間力だけで露臺と生き抜いて行った」とあり、河さんの座右の銘でもある。

■ 未来志向で

寄贈を受けた上村英司北杜市長は「郷土の偉人を、改めて市民の皆さんに知らせていただき感謝している。これを契機に、国際親善の礎を築いた2人の精神を世界に発信したい」と述べた。日韓関係は冷え込んだままで

改善の兆しが見えないが、河さんにとっては日本も韓国も共に愛する「二つの祖国」。これまでに浅川兄弟に学び、日韓の懸け橋として地域に貢献してきた。19年には北杜市の市民栄誉賞を受賞した。

河さんは「日本人、韓国人、在日ということではなく、同じ人間として信頼し合えば物事はうまくいく。温故知新で先達に学び、一歩一歩、未来志向で進んでほしい」と期待した。

「埼玉新聞」(2021年6月24日)

異郷で地域に奉仕

浅川兄弟称え顕彰碑

河正雄さん 北杜市に寄贈

【山梨】日本の支配下にあった樺太島で植林緑化の普及に努め、失われようとする朝鮮民芸の研究に貢献した浅川伯教・巧兄弟の顕彰碑ができた。今年が巧の生誕130年没後90周年の節目にあたることから同日同胞2世の河正雄さん(88)が自らデザインし、兄弟の生まれ故郷、北杜市に寄贈した。除幕式は今秋以降、市の「浅川伯教・巧兄弟資料館」前広場で行われる。

碑のデザインは五重塔一式。下層四段は純白の目をイメージした五層前面に兄弟の顔をデザインしたレリーフと露銘「露堂(のりどう)」と堂堂(のりどう)と谷城を本拠にした「露堂堂(のりどうどう)」と記した風御影版を設置した。

高さ166センチ、幅15センチ、奥行76センチの「長いことをすれば長



除幕式を待つ浅川伯教・巧兄弟顕彰碑

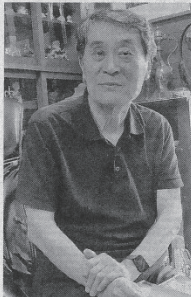
結果が表れ、悪いことをき抜いて行ったから採すれば悪い結果が起こる」という意味も含んだをこめて」と刻んだ。

河さんが一関東大震災直後に牧師として来日し、酪農と西洋野菜の栽培促進による開拓支援で「浅川巧さん」を惜む「清里の父」と呼ばれた文中にあった「百位にも聖蹟に祀られているようにもよることなく、その人にか聖蹟に祀られる人物

問の力だけで露堂堂と生

「露堂堂」を人生の指針に

河さんは1939年、一関大正生まれ。両親は日



河正雄さん

雇いの人夫だった。後に秋田県に移り、就職に有利だからと県立工業高校に入學。しかし、戸籍謄本の不備から一人だけ就職できず、将来を見通せず失意のどん底で悶々としていた高校3年のとき、図書館で出会っ

た。河さんは浅川兄弟を偲ぶ会で講演したのは1997年のこと。20数年間温めてきた構想がようやく実現することになった。いまはコロナ収束後の除幕を心待ちにしているという。

河さんは浅川兄弟資料館のオープンに際しては韓国の人間国宝が制作した。浅川兄弟ゆかりの白磁ぶきで講演したのは1997年のこと。20数年間温めてきた構想がようやく実現することになった。いまはコロナ収束後の除幕を心待ちにしているという。

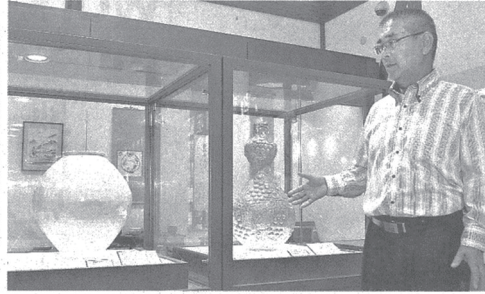
たのが安倍能成さんが書いた浅川巧の追悼文だった。巧を知ったのはこの時が初めて。「露堂堂」すなわち、いことをたさんしなさい、自分が止しと思いう追を堂と歩く、この3つの文字がずっと引っかかっていた。こういう生き方から学ばばつ。この指針になった。僕にとってハイブルのよなもの。高校卒業後、昼間働き、夜間にサインスクールで学んだ。過労がたたり、栄養失調も重なって目を患った。勧め先から自主退社を余儀なくされ、心に大きな痛手を負った。精神的に不安定だった時、登山客に導かれるまま何気なく新宿から中央線に乗車、下車したのが偶然にも浅川兄弟の曾た清里だった。ここでポール・ラッシュ博士に出会い、大きな衝撃を受ける。博士は「異邦人」として地域に理解されない寂しさを河さんに訴えたという。河さんは博士に浅川巧の姿を重ね合わせ、どういつ境遇にあつてもその地域に奉仕するんだという姿に感動を受け、「おれもそういう生き方をしてみたい」と自らに誓ったと明らかにした。

「民団新聞」(2021年7月21日)

朝鮮愛した兄弟の軌跡 伝え20年

旧甲村(後の高根町、現在の北杜市)で生まれ、日本の植民地だった朝鮮に渡り、朝鮮の文化と人々を愛した兄弟の生涯を伝える北杜市の「浅川伯教・巧兄弟資料館」が、7月18日に開館から20年を迎えた。植民地支配にかかわるテーマに正面から取り組む公設のユニークな施設だ。(佐藤純)

北杜 浅川伯教・巧兄弟資料館



資料館によると、兄弟の伯教は1884(明治17)年、弟の巧は91(同24)年、甲村の農家に生まれた。兄は教員をした後、1910(同43)年に日本が植民地にした朝鮮に15(大正2)年に渡り、弟が翌年、後を追った。ともに若いころにキリスト教に出会った。

巧の墓ソウルに

伯教は朝鮮陶磁史の研究に情熱を注いだ。訪ねた窯跡は朝鮮半島全域の約700カ所による。山野の緑化に取り組んだ巧は人々に慕われ、工芸品の研究にも力を入れた。兄弟は民衆運動で知られる柳宗悦と親交を重ねた。巧は31(昭和6)年に病没し、ソウルに墓がある。伯教は戦後に日本に戻り、64年に亡くなった。資料館は、高根町がつくった生涯学習センター内にある。2004年の合併後、北杜市が引き継いだ。一昨年度で毎年1千550人が訪れた。700点余りの収蔵品の中から、459の平方メートルの資料館スペースに貴重な資料や物品、兄弟の活動ぶりを再現したジオラマなどが展示されている。

寄贈された日記

巧が1922、23年に書いた14冊の日記は、日本の敗戦・朝鮮解放後に伯教から託された韓国人男性が大切に保管していた。96年に町に寄贈され、資料館をつくる契機になった。現在は複製が展示されている。23年9月の関東大震災の直後、巧は、東京と周辺で朝鮮人の放火で被害が拡大したとして多くの朝鮮人が殺されたことを知り、日記に書いた。「どうしても信ずることが出来ない。東京に居る朝鮮人の大多数が窮している日本人とその家々が焼けることを望んだ」とは、日本人の差別意識や朝鮮での神社建設を批判する言葉も残した。寄贈した男性は「過酷な日本帝国主义の植民地政策の下、しいたげられた被圧迫民族に温情を注ぐことさえも官僚ににらまれる事であ

った時代に、韓国人を心から愛して下さった巧先生は、泥池に咲き出した一輪の白蓮と申すべきである」と町側に手記を寄せた。資料館はこれまで、朝鮮語版「浅川巧の日記」や「浅川伯教朝鮮古陶磁論集」(全3巻)などの刊行も手がけた。開館20年を記念し、市は今年11月、巧の日記などをもとに兄弟の生涯を描いた漫画を出す。比奈田善彦館長(67)は「漫画を活用し、若い人たちに兄弟を知ってもらう普及活動に取り組むたい」と話す。新型コロナ対策などで8月10、22日は休館する。



1918年の浅川伯教
浅川伯教・巧兄弟資料館提供

1918年の浅川巧
同館提供

「価値ある生き方」「次世代に伝えたい」 ゆかりの人々

埼玉県川口市の在日韓国人実業家で美術品収集家の河正雄さん(81)は今春、兄弟の顕彰碑を北杜市に寄贈し、資料館前に設置された。11月にお披露目の行事が計画されている。

高校生のころ、文相や学習院長を務めた哲学者の安倍能成が巧を追悼した文章を読み、巧を知った。正しく、自由に、自分の力で堂々と生きたという巧にひかれた。河さんは「在日とか、日本とか、韓国とかじゃない。人間として価値ある生き方をした先人に学んだ」と振り返る。

若いころに伯教の窯跡調査を手伝った韓国陶芸界の巨匠・池順鏞さんの青磁と白磁など80点以上を資料館に寄贈してきた。池さんの見事な作品は見学者を引きつける。

北杜市の沢谷滋子さん(68)は2008年に資料館の学芸員になり、11~19年に館長を務めた。「朝鮮でよいことをした日本人見かた」と感じて帰る日本人見かたがいて、一方で、「自虐的だ」という趣旨の批判の手紙が届いたことがあるという。

高根町は2003年、巧がいた林

業試験場の出張所があった韓国の抱川(郡)と本格的に交流を始め、北杜市と抱川市が引き続き。沢谷さんによると、日韓の政府間の関係が悪化すると、自治体交流も停滞し、韓国から資料館を訪れる人は減った。逆に、そんな状況を憂えて足を運ぶ日本人がいた。

沢谷さんは「兄弟の生き方とその時代を次世代に伝えるのが資料館の役割。自分と異なるものどろろ共存していくかを伝えることに存在意義がある」と話す。

「朝日新聞」(2021年8月9日)

朝鮮文化愛した日本人兄弟

浅川伯教・巧 川口の河さんが顕彰碑寄贈



河正雄さんが寄贈した顕彰碑。向かって右に兄の浅川伯教、左に弟の巧の顔が彫られていて、山梨県北杜市の高校生涯学習センター

川口市の在日韓国人実業家で美術品収集家の河正雄さん(81)が、日本の植民地統治下の朝鮮に渡って朝鮮の人々と文化を愛した日本人兄弟の顕彰碑を、兄弟の出身地の山梨県北杜市に寄贈した。北杜市の浅川伯教・巧兄弟資料館前に設置され、市が11月にお披露目を計画している。

「価値ある生き方した先人」

資料館によると、伯教は1884(明治17)年、巧は91(同24)年に、山梨県の旧甲村(後の高根町、現在の北杜市)の農家に生まれた。兄は教員をした後、1910(同43)年に日本が植民地にした朝鮮に13(大正2)年に渡り、弟が翌年、後を追った。

兄は戦後日本へ

伯教は朝鮮陶磁史を研究し、約700カ所の探跡を訪ねた。山野の緑化に取り組んだ巧は人々に慕われ、工芸品の研究にも力を入れた。巧は31(昭和6)年に病没し、ソウルに墓がある。伯教は戦後に日本に戻

り、64年に亡くなった。日韓両国の石を用いた顕彰碑は高さ1・6メートル、幅1・1メートル、奥行き76センチ。兄弟の顔が刻まれ、高根町が2001年につくった資料館を見守るように建つ。6月に予定されていた除幕式はコロナ禍で延期された。

河さんが兄弟のことを知ったのは高校生のころ。哲学者の安倍龍成が巧を追憶した文章を読み、正しく自由に、自分の力で堂々と生きたという巧にひかれた。25年ほど前、巧について書かれた本を知人から紹介され、兄弟の出身地や功績を詳しく知った。川口から山梨に通い、2人の生き方に学ぶ活動を地元の人たちと続けた。

河さんは「在日とか、日本とか、韓国とかじゃない。人間として価値ある生き方をした先人に学んだ。いくつかきこうとした顕彰碑を建てたかった」と話す。資料館ができる際には、自身が集めた美術品の中から約80点を寄贈した。その中には、若いころに伯教の窯跡調査を手伝い、後に韓国陶芸界の巨匠と呼ばれるようになった池順鏞さんの



河正雄さん日本人提供

出身地の山梨に

今年は資料館開館から20年、巧の生誕130年、没後90年の節目の年。河さんは「10年後、僕はいないと思う。だから若い時から思っていたことをやる時だ」と顕彰碑を建立した。

比奈田善彦館長(67)は、兄弟の生き方に学ぶ活動に取り組み市民団体の事務局長も務め、河さんと交流を重ねてきた。「資料館には、日韓友好のための情報発信基地にしてほしい」と河さんの思いが詰まっている」と話す。

兄弟のことを若い世代の人たちに知ってもらおうと、北杜市は11月、2人の生涯を描いた漫画を刊行する。その時期に合わせて改めて顕彰碑のお披露目を催すことを計画している。(佐藤純)

「朝日新聞」(2021年8月11日)

北杜寄贈の顕彰碑披露

浅川兄弟の功績後世に

北杜市は28日、市出身で朝鮮半島の白磁の価値創出に功績を残した浅川伯教・巧兄弟の顕彰碑のお披露目式を行った。浅川兄弟の生き方を私塾などで広めている河正雄さん(89)＝埼玉真川口市＝が寄贈。北杜市高根町村山北割の浅川伯教・巧兄弟資料館前庭に建立された。河さんは「浅川兄弟の偉業や精神を発信する役割を果たしてもらいたい」と話している。



浅川兄弟の顕彰碑を解説する河正雄さん
北杜市高根町村山北割

市教委などによると、今年130年、没後90年などの節目であることを受け、1月に河さんから市に顕彰碑を寄贈する申し出があったという。顕彰碑の設置工事は6月に完了したが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で除幕式は中止した。顕彰碑は高さ約1・7メートル、幅約1・2メートル。四段の石積みの上に伯教と巧の顔が刻まれたフランス製のレリーフがあり、「明らかに表れて堂々としている」という浅川兄弟の

山本就巳

生き方を示す意味の「露堂」の文字が掘られている。裏面には「捧ぐ敬愛と感謝をこめて」と刻まれている。式は同資料館前で開かれ、河さんや上村英司市長、「浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会」のメンバーら約40人が出席。上村市長は「偉大な先人の業績を次世代に伝えていきたい」とあいさつし、河さんは「浅川兄弟の成し遂げた功績を日韓の枠を越えて世界中で共有してほしい」と述べた。この日は八ヶ岳・やまびこホールで、浅川兄弟の功績を顕彰する「浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会」の総会も開かれた。

「山梨日日新聞」(2021年11月29日)

浅川兄弟の功績 讃え顕彰碑設置

山梨県北杜市

日韓友好に尽力した浅川伯教・巧兄弟の功績を讃えた顕彰碑が、美術コレクターで私塾「清里銀河塾」の河正雄氏によって2021年7月に兄弟のふるさとである山梨県北杜市に寄贈された。21年が浅川巧生誕130年(没後90年)に当たることからそれを記念して製作された。

そのお披露目式が、このほど顕彰碑が設置された浅川伯教・巧兄弟資料館で行われた。

同式には、顕彰碑を寄贈した河正雄氏のほか、上村英司・北杜市長、駐横浜大

お披露目式に参加した上村英司・山梨県北杜市長(右から3人目)と顕彰碑を市に寄贈した河正雄氏(左から2人目)ら関係者



韓民国総領事尹喜聚氏、加藤紀雄・北杜市議会議長、浅川兄弟を偲ぶ会の仁科雅会長らが出席した。上村市長からは、顕彰碑の寄贈への感謝の言葉が述べられ、尹総領事と加藤議長から来賓の祝辞が語られた。

高校時代に浅川巧の存在を知った河氏が「巧のように生きたい」と思い、これまで文化事業などを通して、日韓友好のために尽力してきた。浅川兄弟のふるさと、北杜市でも浅川伯教・巧兄弟資料館へ、自身のコレクションを寄付するなど貢献してきた。

河氏が寄贈した顕彰碑は、五重塔をイメージし、

下層四段を国産の稲田石、上層は韓国産谷城石を使い、彫刻家・張山裕史氏が制作した兄弟のレリーフが配されている。

碑銘には、河氏の座右の銘であり、哲学者の安倍能成氏が巧の生き方を一言で表した『霞堂堂』(一切の虚飾を捨て、人として正しくまっすぐに生き抜いていくこと)が刻まれている。

「Sunday 世界日報」(2022年1月2・9日)

아사카와 노리타카·타쿠미 형제 기념 공원 준공식

浅川伯教・巧兄弟記念公園



公園碑 (寄贈 河正雄・浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会)

공원비(기증 하정웅·아사카와 노리타카·타쿠미 형제를 추모하는 모임)

2023년 8월 호쿠토시 令和5(2023)년 8월 北杜市

挨拶



浅川伯教・巧兄弟記念公園は、抱川市との姉妹都市交流 20 周年事業の一環としてこのたび整備を行いました。関係者及び庭石や公園碑をご寄贈いただいた河正雄様、浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会の皆様に心から感謝申し上げます。

巧が働いていた林業試験場があったことが縁となり、抱川市との間で姉妹結縁が締結され、これまで様々な交流が続けられてきました。

この公園には、ソウル忘憂里共同墓地にある巧の墓の脇に林業試験場の同僚の方々が建立した巧の記念碑のレプリカを設置しました。巧の生き方を端的に顕した記念碑を見ることで多くの方に巧の精神に触れていただきたいと思います。

また、公園には抱川市との交流 20 周年を記念し、チョウセンゴヨウマツを植樹しました。韓日多くの方々の努力で開いてくださった交流も 20 年を迎えることが出来ました。このチョウセンゴヨウマツが日々成長をしていくように、抱川市との交流も 50 年、100 年と続け、友好交流の大樹と育てていきたいと願っております。

本市としましてはこれからも浅川兄弟の精神の継承に努め、この公園を北杜市と抱川市、日本と韓国の末永い友好のシンボルとしていきたいと思っております。

北杜市長 上村英司

인사 말씀

아사카와・노리타카 타쿠미 형제 기념공원은 포천시와의 자매도시교류 20 주년 사업의 일환으로 이번에 정비를 실시했습니다. 관계자 및 정원석(庭石)과 공원비(公園碑)를 기증해 주신 하정웅님, 아사카와 노리타카・타쿠미 형제를 추모하는 모임의 여러분들께 진심으로 감사드립니다.

타쿠미가 일하던 임업시험장이 위치해 있던 것이 인연이 되어 포천시와 자매결연이 체결되어 그동안 다양한 교류를 이어왔습니다.

이 공원에는 서울 망우리 공동묘지의 타쿠미 묘소 옆에 있는 임업시험장 동료분들이 세워주신 타쿠미 기념비의 복제본을 설치하였습니다. 타쿠미의 삶을 단적으로 보여준 기념비를 통해 많은 분들에게 타쿠미의 정신을 알릴 수 있었으면 좋겠습니다.

또한 공원에는 포천시와의 교류 20 주년을 기념하여 조선오엽송을 심었습니다. 한일 간의 많은 분들의 노력으로 이어온 교류도 20 년을 맞이할 수 있었습니다.

이 조선오엽송이 나날이 자라듯이 포천시와의 교류도 50 년, 100 년으로 지속되어 우호 교류의 큰 나무로 자라기를 바랍니다.

호쿠토시는 앞으로도 아사카와 형제의 정신을 계승하기 위해 노력하고, 이 공원을 포천시와 호쿠토시, 한국과 일본의 오랜 우호의 상징으로 삼고자 합니다.

호쿠토시장 카미무라 에이지

【巧記念碑レプリカ】

ソウルにある忘憂里共同墓地にある巧の墓の脇には、1984年に国立林業試験場の同僚の方々が建立した巧の記念碑があります。記念碑にはハングル語で「韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心の中に生きた日本人、ここ韓国の土となる」と刻まれています。韓国の人々を心から愛し、民族や国境を越えた巧の生き方のシンボルとして、多くの人々に感銘を与えています。

今回、兄弟の精神の象徴として記念碑のレプリカを制作し、設置しました。



【타쿠미 기념비의 복제본】

서울 망우리 공동묘지에 있는 타쿠미의 묘소 옆에는 1984년 국립 임업 시험장의 동료분들이 세운 타쿠미의 기념비가 있습니다. 기념비에는 한글로 「한국의 산과 민예를 사랑하고 한국인의 마음속에 살다 간 일본인, 여기 한국의 흙이 되다」라고 새겨져 있습니다. 한국 사람들을 진심으로 사랑하고 민족과 국경을 초월한 타쿠미의 삶의 상징으로서 많은 사람들에게 감명을 주고 있습니다.

이번에 형제 정신의 상징으로서 기념비의 복제본을 제작하여 설치하였습니다.

【記念植樹】

林業技師であった巧は、荒廃した韓国の山々を緑にするため、露天埋蔵法という画期的な幼苗法を開発し、これまで幼苗が難しかったチョウセンゴウマツの植樹を進め、韓国の緑化に大きな貢献をしました。

今回、抱川市との交流 20 周年を記念して、チョウセンゴウマツの苗木を植樹しました。

【기념 식수】

임업기사였던 타쿠미는 황폐한 한국의 산들을 푸르게 만들기 위해 노천매장법이라는 획기적인 발아 촉진법을 개발하여, 그동안 발아가 어려웠던 조선오엽송의 식목을 추진해 한국의 산림녹화에 큰 기여를 하였습니다.

이번 포천시와의 교류 20 주년을 기념하여 조선오엽송 묘목을 식수하였습니다.



【浅川伯教・巧兄弟顕彰碑】

この顕彰碑は、浅川巧生誕 130 年（没後 90 年）にあたり、2021 年に河正雄氏から寄贈されたものです。韓国産谷城石を本磨きしたところに、兄弟のレリーフが配されています。

碑銘に、安倍能成が巧の生き方を一言で表した『露堂堂』の文字が刻まれ、“一切の虚飾を捨て、人として正しくまっすぐに生き抜いていくこと”への想いが込められています。

【아사카와 노리타카・타쿠미 형제의 현창비】

이 현창비는 아사카와 타쿠미 탄생 130 주년(사후 90 년)에 즈음하여, 2021 년에 하정웅씨로부터 기증받은 것입니다. 한국산 곡성석을 윤이 나게 연마한 곳에 형제의 릴리프가 배치되어 있습니다. 묘비명에 아베 요시시게가 타쿠미의 삶을 한마디로 표현한 '노당당(露堂堂)'이라는 글자가 새겨져 있어 "일체의 허식을 버리고 사람으로서 올바르게 곧게 살아가는 것"에 대한 마음이 담겨 있습니다.



【トルハルバン】



トルハルバンは、韓国・済州島にある石造物で、済州島の方言で「石製のおじいさん」を意味します。大きな目、鼻を持ち、韓国伝統の帽子をかぶっています。済州島では、守護神として町の入り口に置かれています。

公園の入り口に設置され、公園に来る人々を見守ってくれています。
(寄贈：河正雄氏)

【돌하르방】

돌하르방은 한국 제주도에 있는 석조물로, 제주도 사투리로「돌할아버지」라는 의미입니다. 커다란 눈과 코에 한국 전통 모자를 쓰고 있습니다. 제주도에서는 수호신으로서 마을 입구에 놓여 있습니다. 공원 입구에 세워져 공원에 오는 사람들을 지켜주고 있습니다。

(기증：하정웅씨)

浅川伯教・巧兄弟公園竣工を祝う

私塾清里銀河塾塾長 河正雄

2021年6月、上村英司山梨県北杜(ほくと)市長と偶然に二人だけで会話を交わす機会があった。その時、「2023年は韓国抱川市との姉妹都市交流20周年になる。市長就任後、初めての抱川市を表敬訪問する予定である。」と語った。

「八ヶ岳やまびこホールと浅川兄弟資料館前の敷地を整備して浅川兄弟を顕彰する記念公園が出来れば聖地と成り得る。きっと抱川市との良き記念行事になるでしょう。計画されるならば庭石と石像を寄贈しましょう。」と絵を描いて提言した。

富士山が正面、西側には南アルプスの山並、東側には秩父の山並、三つの国立公園が一望に展望されるパノラマの景勝地で、得も言われぬ適地であったからだ。

まもなく北杜市教育委員会と偲ぶ会から図面が提示され、具体化、実現の運びとなったのは必然性と時期が熟したからだと思う。

こうして浅川伯教・巧兄弟の生誕地に北杜市が浅川兄弟の功績を讃える浅川兄弟の記念公園が竣工した。

2021年に私が建立・寄贈した兄弟の顕彰碑周辺を芝に張り替え、忘憂里の巧の墓にある碑のレプリカを設置、整備したものだ。

2023年8月6日には白永鉉抱川市長等の訪問団14名、金玉彩駐横浜総領事等多くの来賓を迎え八ヶ岳やまびこホールで竣工式が挙行された。加藤寿北杜市教育部長が経過報告された。

「本年が北杜市と抱川市との姉妹都市結縁の締結から20年の節目であることから、記念事業を検討する中、両市の交流のきっかけとなった浅川兄弟の精神を顕彰し、両市の末永い友好の象徴となる記念公園を整備することといたしました。

折しも、河正雄様から、記念公園の整備に活用してほしいと、庭石や石造物を寄贈したい旨のお話がありました。また、庭石の一つについては、浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会が公園の銘を刻印したうえで寄贈いただけることとなり、4月正式に寄贈の申し出をいただきました。

本市としましては、河様、偲ぶ会の皆さまからのお申し出を有り難くお受けし、寄贈いただいた石等を活用しながら5月より公園の整備工事を行ってまいりました。7月末に無事完成をし、本日竣工式を開催する運びとなったところでございます。」

感無量の私は、慶祝と感謝の言葉を述べて喜びを共有した。

「本日は北杜市と韓国抱川市との姉妹都市交流20周年記念事業としての、浅川伯教・巧兄弟記念公園の設立竣工、誠におめでとうございます。祖国・韓国抱川市の皆様の北杜市訪問を心より歓迎申し上げます。

このような席に招待され、ご挨拶出来ますことを光栄に思います。今から65年前、私が秋田工業高校3年の時、安倍能成著『青丘雑記』の一文で浅川巧の追悼文を読み、心に刻みました。それは「露堂堂」という言霊(ことだま)でした。それから10年たち、「露堂堂」と生きる深い意味を知りました。

以来、浅川兄弟への敬愛と感謝、あこがれを抱いて在日を生きて来ました。日韓で初めて1995年、浅川巧没後64年祭を忘憂里墓地で執り行い、ソウルのロッテホテルでの追悼式で追悼致しました。

その時発足した偲ぶ会に参加し、資料館の設立、私塾清里銀河塾開校、映画「白磁の人」制作等に関与。2021年には浅川巧生誕130年没後90年を記念して「敬愛と感謝を込めて」「露堂堂」の碑文を刻み、浅川兄弟の生誕地に顕彰碑を建立出来ましたことは、私の大きな喜びでありました。

この度の抱川市との20周年記念行事の話を上村英司市長様から聞いたのは、その顕彰碑建立の時です。その後、記念公園計画を市と偲ぶ会から図面を示され、その計画が具現されますよう、私は別荘にある庭石12個と石造物(濟州道産)の寄贈を致しました。

市と偲ぶ会は寄贈庭石の一つを活用、碑文とし、「浅川伯教・巧兄弟記念公園」と刻み建立されました。その先見性と創造性、意欲と実行力に感嘆、感激致しました。

また、本日記念公園竣工を記念し、浅川巧先生が養苗開発しました、ゆかりの朝鮮五葉松の苗木を植樹致します。

実は10数年前、山びこホール玄関先に日韓友好親善を祈念し、植樹を致しましたが枯れてしまいました。木が枯れることを想定していた、清里銀河塾で学んだ在日の辛昌錫氏が実生(みしょう)の種を届けて下さり、別荘に庭に蒔き2~3年経って芽が出た時には万歳致しました。その苗を比奈田善彦資料館館長に委ね、その後10年近い歳月をかけて育て上げた苗木です。

大きく育って、末は名木大木となって日韓に友好親善を見守り、我々に幸を、エールを贈って下さるものと頼もしく思う次第です。

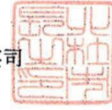
これまでの多くの行程、営みこそが浅川兄弟の遺徳、恩徳である、今を生きる我々への教えであり、「露堂堂」と生きる証であると思います。感謝に耐えません。

これを機に、日韓の友好と親善、国際交流が一層推進されて、この公演が日韓のゆるぎない絆になりますよう、そして北杜市と抱川市の発展を幸多かれと祈念します。」

北杜学術第 236 号
令和 5 年 4 月 / 日

河 正雄 様

北杜市長 上村 英司



寄付採納受諾書

令和 5 年 4 月 1 日付けでお申し出のありました、下記の寄付につきましては、
受諾させていただきます。
貴殿の御厚意に心から感謝申し上げます。

記

寄付の内容	庭石 (石造物)	(W40×D53×H128 cm)
	庭石 (割石)	(W225×D85×H60 cm)
	庭石 (割石)	(W228×D56×H70 cm)
	庭石 (自然石)	(W148×D110×H45 cm)
	庭石 (自然石)	(W85×D35×H80 cm)
	庭石 (台石) 7 個	(およそD40×H25 cm)

寄付採納受諾書 (庭石)

北杜学術第 237 号
令和 5 年 4 月 / 日

河 正雄 様

北杜市長 上村 英司



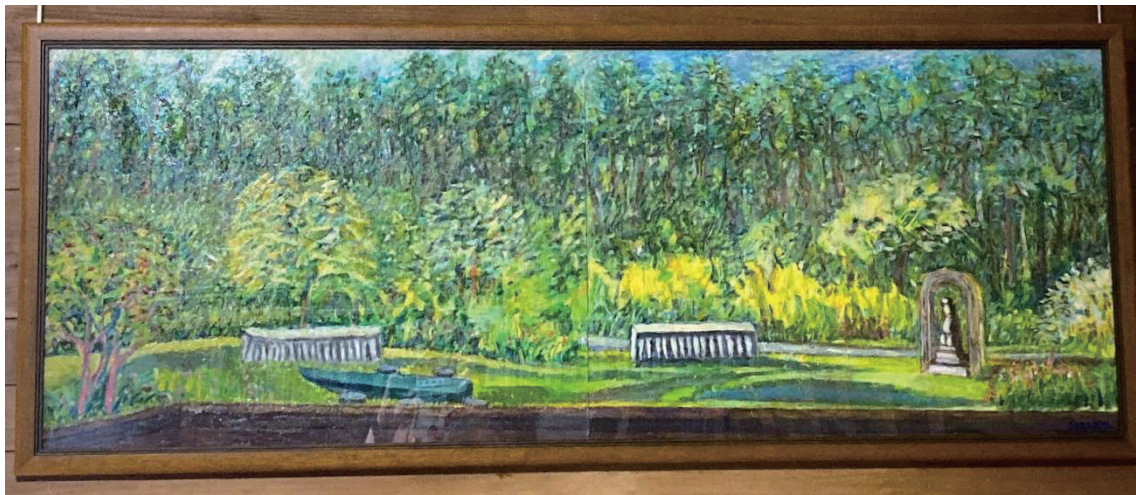
寄付採納受諾書

令和 5 年 4 月 1 日付けでお申し出のありました、下記の寄付につきましては、
受諾させていただきます。
貴殿の御厚意に心から感謝申し上げます。

記

寄付の内容	公園碑	(W35×D83×H230 cm)
-------	-----	-------------------

寄付採納受諾書 (公園碑)



浅川伯教・巧兄弟記念公園への石材寄贈前の庭園風景（油絵 河正雄作「清里の庭」 2023年作 144×53.5cm）



浅川伯教・巧兄弟記念公園に設置された庭石（2023年8月）



NO1 庭石（石像）（高）128×（横）40×（奥幅）53



NO2 庭石（1）（高）60×（横）225×（奥幅）85



NO3 庭石（2）（高）70×（横）228×（奥幅）56



NO4 庭石（3）（高）35×（横）230×（奥幅）83

● かいじネットワーク ●

浅川兄弟記念公園が完成

北杜 あす韓国訪問団と式典

北杜市は、日本統治時代の朝鮮半島で緑化や白磁の価値創出に努めた北杜市出身の浅川伯教・巧兄弟の功績をたたえる記念公園を整備した。2021年に寄贈された浅川兄弟の顕彰碑周辺を芝に替え、巧の墓にある碑のレプリカやモニュメントを設置。6日は姉妹都市の韓国・抱川市の訪問団を迎え、竣工式を行い、完成を祝う。(本場葉摘)



整備された浅川伯教・巧兄弟記念公園
＝北杜市高根町村山北割

北杜市が抱川市との姉妹都市締結20周年を記念して企画した。同市高根町村山北割の八ヶ岳やまびこホールの玄関前に整備し、面積は約170平方メートル。今年5月に着工し、ソウルの巧の墓にある記念碑のレプリカを設置したほか、「浅川伯教・巧兄弟記念公園」と書かれた碑も建立した。訪問団は4日に来日。抱川市のベク・ヨンヒョン市長と上村英司市長らが6日の竣工式に出席する。韓国の山林緑化に努めた浅川巧とゆかりのある朝鮮五葉松を植樹するといふ。

市の担当者によると、公園には関係者から寄贈されたモニュメントなども設置する。担当者は「2人の功績や精神を発信する場にしたい」と話している。浅川兄弟は日本統治時代の朝鮮半島に渡り、主に白磁を中心とする朝鮮王朝時代の工芸品を調査、収集。朝鮮民族美術館を設立し、現地の文化の保存に努めた。巧は荒廃した山林の緑化にも貢献した。

「山梨日日新聞」(2023年8月5日)

北杜・浅川記念公園で竣工式 韓国訪問団と完成祝う

北杜市が整備した市出身の浅川伯教・巧兄弟の功績をたたえる記念公園の竣工式が6日、同市高根町村山北割の八ヶ岳やまびこホールで行われた。姉妹都市の韓国・抱

川市の関係者らが出席し、完成を祝った。

北杜市が抱川市との姉妹都市締結20周年を記念し、同ホール前に整備。約170平方メートルの公園内には浅川兄弟の顕彰碑や、ソウルの巧の墓にある記念碑のレプリカなどを設けた。浅川兄弟の生き方を私塾などで広めている河正雄さん(83) Ⅱ埼玉真川口市Ⅱや、「浅川伯教・



朝鮮五葉松を植樹する上村英司市長(右から2人目)、白永鉉市長(同3人目)らⅡ北杜市高根町村山北割

巧兄弟を偲ぶ会(清水光会長)が寄贈した石碑やモニュメントも飾られている。

竣工式には上村英司市長や4日に来日した抱川市の白永鉉市長ら約40人が出席。関係者がテープカットした後、韓国の山林緑化に尽力した巧とゆかりのある朝鮮五葉松を植樹した。

白市長は式典で「浅川伯教が残した民芸品は貴重な文化資産に、巧が緑化に努めた山林も重要な自然資産になっている。今後も北杜市と持続可能な交流を続けたい」とあいさつした。〈木場菜摘〉

「山梨日日新聞」(2023年8月7日)

姉妹都市交流20周年 山梨県北杜市と京畿道抱川市



開会式のもよう

山梨県北杜市では6日、韓国の京畿道抱川市との姉妹都市交流20周年を祝賀する事業として、「浅川伯教・巧兄弟記念公園竣工式」を執り行った。会場となった同市の八ヶ岳やまびこホールには両市の関係者約40人が集まった。

「韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心の中に生きた日本人、この韓国の土となる」とハンゲルで刻まれた記念碑が抱川市の忘憂里共同墓地に存在するが、今回の記念公園整備事業によりレプ

リカが日本の郷里にも設置された。また、林業技師であった巧とゆかりの深い朝鮮五葉松も植樹された。上村英司・北杜市長は式典での主催者あいさつで、公園に碑を寄贈した河正雄さんが松を発芽させ、比奈田善彦・浅川兄弟資料館長が育てた背景に触れながら、「今日植えた木が100年後に大きな松となり、韓日交流・友好のためのシンボルになれば」と話した。祝辞を述べた金玉彩・駐横浜韓国総領事は今回の事



「北杜ふるさと祭り」で公演する抱川市民俗芸術団

業のために尽力した清水光し、兄・伯教(のりたか)と協力して難しい時代だった韓国を2人が愛して感謝を伝え、関係者を労った。「韓日両国民が浅川兄弟の夢を共有し、自由民主主義をうたう国同士として協力していくのは当然」と語った。

続けて尹忠植・京畿道議会議員は、没後92年が経つ巧が韓国の山林緑化に貢献した。行事の冒頭、抱川市民俗芸術団による公演が行われ、会場は大いに盛り上がった。

白永鉉・抱川市長は公演前のあいさつで、「20年間協力し、互いの文化交流を尊重してこられたことに感謝したい。祭りを通じて両市・韓日でのより深い友好の発展を期待する」と述べた。

竣工式の終了後、長坂総合スポーツ公園野球場で「(第12回)北杜ふるさと祭り」がコロナ禍以降4年ぶりに開催された。行事の冒頭、抱川市民俗芸術団による公演が行われ、会場は大いに盛り上がった。

韓日の懸け橋 浅川伯教・巧兄弟を顕彰

北杜市が「記念公園」整備

抱川市と姉妹交流20周年 在日同胞も連名で石碑寄贈



抱川市と北杜市の両関係者らによるテープカット

【山梨】山梨県北杜市（上村英司市長）と京畿道抱川市の姉妹都市交流20周年を祝う「浅川伯教・巧兄弟記念公園」が6日、お披露目された。式典には抱川市から白永路市長を代表とする文化交流団一行12人が参加した。両市は高根町出身の浅川兄弟のつながりで2003年3月、姉妹血縁盟約書に調印。文化交流、中学生のホームステイ、職員派遣事業を継続している。

北杜市が「浅川伯教・巧兄弟記念館」の建つ八ヶ岳やまのホールの敷地を9月から整備し、7月末に完工させた。園内にはソウル・忘憂里共同墓地にある巧のハンケル記念碑を複製し、設置した。在日同胞の世の河正雄さん（埼玉京川口市）も「浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会」（清水光会長）との連名で公園碑などを寄贈した。上村市長は記念碑に刻まれた巧の「韓国の上にならぬ」との言葉に触れ、「浅川兄弟の功績や精神をさらに広げ、公園を韓日友好のシンボルにしていきたい」と意気込みを語った。

抱川市の白市長も「姉妹都市交流20年の歴史は浅川兄弟の業績を抜きにしては語れない」と強調。京畿道議会の尹忠植議員は「兄弟の業績を永遠に記憶していく」と心に誓った。駐横浜総領事館に就任して以来初めて北杜市を訪問した金玉彩総領事は北杜市による記念公園の整備を「韓日民間交流の

浅川兄弟とは
北杜市高根町生まれ。弟の巧は日本統治下の韓国で林業試験場に勤務し、韓半島の緑化に努めた。40歳で急逝すると、巧を慕う多くの人たちに見守られ、朝鮮人共同墓地に葬られた。墓のそばには林業試験場の同僚たちが「韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心の中に生きた日本人（こゝ韓国の上にならぬ）」とハンケルで刻んだ記念碑を設置した。一方、兄の伯教は朝鮮白磁に魅了される。柳宗悦や巧とともに文化擁護と継承のため、700万所余りの窯跡を調査し500年にわたる朝鮮陶磁の歴史をまとめあげた。

「民団新聞」（2023年8月15日）

韓国・抱川市との姉妹都市交流20周年事業

山梨県北杜市 浅川伯教・巧兄弟記念公園竣工

韓国の抱川市と日本の北杜市（山梨県）の姉妹都市交流20周年事業「浅川伯教・巧兄弟記念公園竣工式」が6日、同市のハヶ岳やまびこホールで開かれた。

日本統治時代の朝鮮半島で緑化などに努めた浅川伯教・巧兄弟が北杜市出身であったことから、北杜市は浅川伯教・巧兄弟資料館を2001年に設立し、その業績を伝えてきた。また、浅川巧が働いていた林業試験場が抱川市にあったことが縁となり、抱川市との間で03年に姉妹結縁が締結され、文化交流や中学生のホームステイ事業、職員相互派遣交流など、様々な交流が行われてきた。

浅川伯教・巧兄弟記念公園は姉妹都市交流20周年事業の一環として今回整備され、白永絃・抱川市長をはじめとする訪問団が北杜市を訪れ、「浅川伯教・巧兄弟記念公園竣工式典」が行われた。公園には、ソウル忠愛里共同墓地にある巧の墓



河正雄さん寄贈の公園碑

の脇に林業試験場の同僚らが建立した巧の記念碑のレプリカを設置。また、抱川市との交流20周年を記念して朝鮮五葉松を植樹した。

上村英司・北杜市長は「朝鮮五葉松が日々成長をしていくように、抱川市との交流も50年、100年と続け、友好交流の大樹と育てていきたい。これからも浅川兄弟の精神の継承に努め、この公園を北杜市と抱川市、日本と韓国の永い友好の

河正雄・光州市立美術館名誉館長 日韓の友好・親善推進の契機に



浅川伯教・巧兄弟への敬愛と感謝

謝、あごがれを抱いて日々生きてきました。日韓で初めて95年、浅川巧没後64年祭を忠愛里墓地で執り行い、ソウルのロッテホテルでの追悼式で追悼致しました。



朝鮮五葉松の植樹式

シンボルとしていきたい」とあいさつした。公園には、在日2世の実業家で浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会の河正雄さんが寄贈した公園碑も建てられた。

また浅川伯教・巧兄弟資料館では、「北杜市・韓国抱川姉妹都市交流」20周年記念写真パネル展が開かれ、20年間の交流の歩みを伝えている。11月12日まで。

その時発足した偲ぶ会に参加し、資料館の設立、私塾清里銀河塾開校、映画「白磁の人」制作等に関与。21年には浅川巧生誕130年没後90年を記念して「敬愛と感謝を込めて」「露堂堂」の碑文を刻み、浅川兄弟の生誕地に顕彰碑を建立出来ました。

抱川市との20周年記念行事の話を上村英司市長様から聞いたのは、その顕彰碑建立の時でありました。その後、記念公園計画を市と偲ぶ会から図面を示され、その計画が具現されますよう、私は別荘にある庭石12個と石造物（済州道産）の寄贈を致しました。市と偲ぶ会は寄贈庭石の一つを活用、碑文とし、「浅川伯教・巧兄弟記念公園」と刻み建立されました。これを機に、日韓の友好と親善、国際交流が一層推進されて、この公園が日韓のゆるぎない絆となりましますよう、そして北杜市と抱川市の発展を幸多かれと祈念します。

「東洋経済日報」（2023年8月18日）

기고

아사카와 형제 기념공원 준공에 부쳐



하정웅
광주시립미술관 명예관장

지난 8월 6일 일본 야마나시현 호쿠토시에서 한 일본인 형제의 이름을 딴 공원 준공식이 열렸다. 이곳이 고향인 형제를 기리는 '아사카와 노리타카 다쿠미 형제 기념공원'이다.

공원의 주인공인 아사카와 형제는 한국과 인연이 깊다. 아사카와 다쿠미(1891-1931)는 1914년 조선으로 건너가 17년을 살았으며 사후 한국 땅에 묻혔다. 그는 조선총독부 산림과에 근무하며 조선의 산림녹화에 지대한 공헌을 한다. 뽕종수목원과 광종수목원을 탄생시킨 주인공으로 한국 인공림의 37%는 다쿠미의 노력의 결과이기도 하다.

그는 산림 조성을 위해 조선 각지를 돌아다니는 과정에서 조선 민예품의 아름다움과 독자성에 눈을 뜬다. '조선 도자기의 산'으로 불리는 그의 형 아사카와 노리타카, 그리고 형 소개로 만난 야나기 무네요시와 함께 조선민족미술관 건립에 힘썼으며 조선 민예의 가치를 알리는 데 생을 바쳤다. 조선과 조선인, 조선의 문화를 진정으로 사랑했던 그는 유언대로 서울 망우리 공동묘지에 묻혔으며 그의 묘비에는 '현국의 산과 민예를 사

랑하고 한국인의 마음속에 살다 간 일본인, 여기 한국의 흙이 되었다'라고 적혀 있다.

지금부터 66년 전 야카타 공립고등학교 3학년 때 아베 요시시게의 '청구잡기에 살린 아사카와 다쿠미의 주도론 중 한 문장인 '노당당(露堂堂)'이라는 명쾌한 말(露堂)은 내 마음에 꽂혔다. 그 후 나는 국가, 민족, 종교 등 모든 장벽과 경계를 넘어 인류애를 실천한 아사카와 형제에 대한 경애와 감사, 동경을 품고 재일교포로 살아왔다.

1995년 한국에서는 처음으로 아사카와 다쿠미 64주기제가 망우리 묘지에서 거행되고 서울 롯데호텔에서 추도식이 열렸다. 그 후 나는 일본에서도 아사카와 다쿠미의 재조명이 필요하다고 생각해 '아사카와 다쿠미 추모 모임'과 함께 그의 고향 호쿠토시 기요사토에 '아사카와 노리타카 다쿠미 형제 자료관' 설립을 주도하고 현국의 공예품을 기증했다. 또한 내 인생의 나침반과 같았던 다쿠미의 고향 기요사토에 별장을 짓고, 그의 삶과 가르침을 공유하기 위해 사속 기요사토간자주크를 개설해 매년 한국과 일본의 청년들을 교육하는 행사를 열고 있다.

아밖에도 다쿠미의 생을 기린 영화 '백자의 사람' 제작 등에 관여했으며 2021년에는 아사카와 다쿠미 탄생 130년, 서거 90주년을 기념해 '경애와 감사를 담아', '노당당(露堂堂)'이라는 비문을 세기고 아사카와 형제 탄생지에 현장비를 건립했다.

이 공원에는 나의 별장이 있던 정원석 12개와 석물(제주도산)을 기증했고, 그 정원석 중 하나에 추모 모

임에서 공원 이름을 각인했다. 공원 조성 재안을 받아 들인 가미무라 시장을 비롯한 호쿠토시와 추모 모임의 장의성, 의욕과 실행력에 감사할 따름이다.

정원에는 아사카와 다쿠미 선생이 개발한 묘목인 '조선오얏송' 묘목을 심었다. 사실은 10여 년 전, 야마비코 홀 현판 앞에 한일 우호 친선을 기원하며 이 나무를 심었는데 사들어 버린 적이 있다. 만약을 대비해 기요사토간자주크에서 공부했던 재일교포 신광석씨가 보내준 씨앗을 내 별장 마당에 뿌려두었는데, 2-3년이 지나 썩어 있을 때는 기쁨의 만세를 불렀다. 그 묘목을 아사카와형제자료관 관장에게 맡겨 10년 가까운 세월 동안 길러냈고, 이번에 식재하게 됐다. 앞으로 크게 자라서 명목, 대목이 되어 한일 우호 친선을 지켜보며 우리에게 행복과 성원을 보내줄 것이라 믿는다.

공원에는 2021년 필자가 기증한 형제의 현장비 주변이 잔디로 교체되고 서울 망우리의 다쿠미 묘비가 복제 설치돼 있다. 이번 준공식은 호토우사와 자매도시인 경기도 포천 방문단과 주요교하며 대한민국 총영사관 김옥제 총영사 등이 참여했다.

지난 2021년 6월 우연히 호쿠토의 가미무라 에이지 시장에게 아사카와형제자료관 앞 부지 등을 정밀해 아사카와 형제를 현장하는 기념공원을 조성한다면 한일 양국 교류의 상징적 의미가 될 수 있을 것이라는 재안을 했었다. 그날의 제안이 어떻게 실현돼 남다른 감회를 느낀다.

아사카와 형제 기념공원 준공을 계기로 한일 우호와 친선 국제교류가 한층 진전되기를, 이 공원이 한일 간의 흔들림 없는 유대의 매개체가 되길 바란다.

「光州日報」(2023年8月31日)

河正雄 経歴

かわ・まさお(ハ・ジョンウン、Ha Jungwoon)

1939(昭和 14)年11月3日・大阪府布施(東大阪)市生

1 学歴

1947年 大阪朝連布施初等学校入学

1948年 秋田県仙北市立生保内小学校転校

1953年 秋田県仙北市立生保内小学校卒業

1956年 秋田県仙北市立生保内中学校卒業

1959年 秋田県立秋田工業高等学校機械科卒業

2003年 朝鮮大学校(韓国)美術学博士学位授受

2007年 朝鮮大学校(韓国)デザイン大学院招聘客員教授

2009年2月11日 釜山広域市名誉市民証

2012年10月17日 韓国宝冠文化勲章

2018年9月5日 国家ブランド振興院2018国家ブランド大賞

2019年11月1日 山梨県北杜市制定15周年記念「市民栄誉賞」

2020年12月21日 韓国文化芸術委員会今年の芸術後援人メセナ大賞

2023年3月25日 日本国紺綬褒章叙勲(6月9日授受)

2 職歴・経歴

河本電機商事代表(1964～1977)

株式会社かわもと代表取締役(1972～2024)

光州市立美術館終身名誉館長(2011年11月1日～)

私塾・清里銀河塾長(2006年5月20日～現在)

3 賞罰

1989年4月20日 第9回韓国障害者の日 国務総理賞

1993年10月8日 韓国光州広域市名誉市民章

1994年2月5日 韓国国民勲章冬柏章

1995年8月15日 ソウル特別市名誉市民章

2000年11月1日 第35回光州広域市市民の日「市民の賞」

2008年9月30日 第33回韓国霊岩郡「郡民の賞」

2009年1月7日 全羅北道名誉道民証

河正雄 著書

- 1982年 『全和凰一祈りの芸術』(求龍堂)
- 1993年 『望郷—二つの祖国』(成甲書房)
- 1995年 『恨‘95』(民衆社)
- 1997年 『河正雄講演集「伯仲」』(河正雄を囲む会)
- 1998年 『「縁」朝鮮人無縁仏に捧げる』(河正雄を囲む会)
- 2002年 『韓国と日本 二つの祖国に生きる』(明石書店)
- 2002年 『二つの祖国』(韓国・マジユ・翰社 ハングル版)
- 2006年 『祈りの美術』(イズミヤ出版)
- 2006年 『念願の美術』(韓国文化交流センター ハングル版)
- 2008年 『尋劔堂』(イズミヤ出版)
- 2010年 『尋劔堂』(韓国文化交流センター ハングル版)
- 2010年 『和田和雄「美の黙示録」』(河正雄編)
- 2014年 『予響曲』(イズミヤ出版)
- 2014年 『ナルマダハングルム・毎日一步一步』(メディチメディア社 ハングル版)
- 2016年 『ナルマダハングルム・毎日一步一步』(メディチメディア社 ハングル・日本語版)
- 2017年 『ちちははの思うことのみ』(KOREA TODAY ハングル・日本語版)
- 2018年 『傘寿を迎え「露堂堂と生きる」』(日本語版)
- 2019年 『令和を迎え「仏光普照」』(日本語版)
- 2020年 『令和を迎え「仏光普照」』(ハングル版)
- 2020年 『河正雄コレクション資料集第1号 関根伸夫』
- 2021年 『河正雄コレクション資料集第2号 川田泰代』
- 2021年 『河正雄コレクション資料集第3号 岩田健』
- 2021年 『河正雄コレクション資料集第4号 江上越』
- 2021年 『河正雄コレクション資料集第5号 菊池一雄』
- 2022年 『河正雄コレクション資料集第6号 千葉成夫』
- 2022年 『河正雄コレクション資料集第7号 植松永雄』
- 2022年 『河正雄コレクション資料集第8号 河明求』
- 2024年 『河正雄講演録』(私塾・清里銀河塾)

私塾清里銀河塾

河正雄講演録

私と清里 露堂堂と生きる

2024年7月20日発行

編著・発行 河正雄

〒333-0815 川口市北原台 1-24-31

Tel 048-295-5267 Fax 048-297-3201

E-mail: j.ha.inori@key.ocn.ne.jp

<https://www.ha-jw.com/>

制作 菊地 正志

印刷製本 株式会社 双信舎印刷

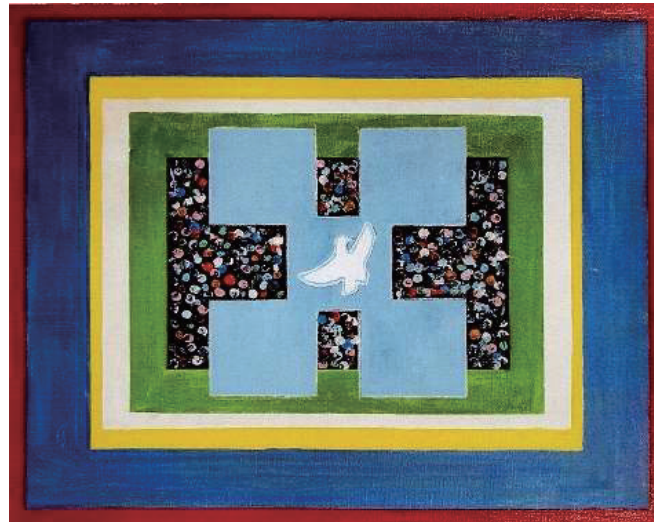
非売品



河正雄のLINE

【表紙】 浅川伯教・巧兄弟記念公園碑（山梨県北杜市）

【裏表紙】 河正雄作「五元」（油絵 2012）



油絵「五元」の解説

五元は「東洋哲学の地水火風空」を意味する。河正雄のメセナ精神は彼の独創的な作品に良く表れている。彼の作品の中心の主題は「平和と幸福」だ。平和のある所に本当の幸せがあるということだ。「このように開かれた世の中、一つになる世の中」を志す河正雄は、地球の五大陸を象徴する「五元」を自らデザインし著書毎に表示している。すべての政治的理念や争いを超えて真に一つになる世界、平和を祈願し愛情に満ちた友好と親善を深め、全人類が協調し合う理念を描いている。「五元」の作品は1960年代頃に日本デザインスクールで学んでいた時の発想からである。2012年9月3日に開館した霊岩郡河正雄美術館ホールに「五元・シグナル」を制作、展示して夢を叶えた。2013年8月24日、サンクトペテルブルクにあるエルミタージュ美術館のフランス館で「五元」をテーマにしたアンリ・ル・フォーコニエ（1881—1946年）作品「シグナル」に出会う。偶然が必然となる出会いで、国と時代が違えども、私と同じ哲学発想の作品が既に遺されていたことに深い感動を得た。

（河正雄作 油彩 53.0×45.5 cm 2012）

—— 河正雄講演録 ——

私と清里

露堂堂と生きる